

K-609

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

巾 遺 跡

発掘調査報告書
— 第2次調査 —

1984

尾花沢市教育委員会

序

本報告書は、尾花沢市教育委員会が昭和58年度に実施した、新農業構造改善事業・細野地区に係る、巾遺跡の第2次発掘調査の成果をまとめたものであります。

尾花沢市には、数多くの遺跡が確認されておりますが、本遺跡もその一つで、縄文時代の代表的な遺跡として、古くから知られていたようです。2ヶ年度の発掘調査により、縄文時代中期の埋甕・土壙等をはじめ、多くの土器や石器が発掘されました。雪深い地と知られる当地において、きびしい自然環境の中でたくましく生きぬいた先人の苦労と知恵がしのばれるところです。

近年、地域開発と埋蔵文化財との係わりが密になってきておりますが、これら諸事業との調和をはかり、埋蔵文化財の保護と普及をはかることも今後の重要な課題であろうと存じます。本報告書が、その埋蔵文化財に対する理解とともに、保護、普及、研究等の一助となれば幸せと存じます。

最後に調査にあたって、連日の雨天にもかかわらず発掘作業に従事された作業員の方々をはじめ、多大なご協力をいただいた地元の方々、諸関係機関の方々に、心から感謝申し上げる次第であります。

昭和59年3月

尾花沢市教育委員会
教育長 小松正四郎

例　　言

1. 本報告書は、山形県尾花沢市大字巾・カバ山に所在する「巾遺跡」の第2次発掘調査報告書である。調査は、尾花沢市教育委員会が主体となり、昭和58年8月17日～同年9月12日の延べ20日間にわたって実施した。
2. 本調査は、「新農業構造改善事業」に伴う緊急発掘調査である。調査にあたっては、昭和58年度国庫補助金の交付を受けた。
3. 調査は、下記要領で実施した。

調査主体 尾花沢市教育委員会
調査担当者 大類 誠（現場主任） 菅野 代（調査員）
発掘員 五十嵐仲左衛門、五十嵐忠一、五十嵐清右衛門、五十嵐茂一、五十嵐マサエ、五十嵐トキ、五十嵐一子、五十嵐キヨエ、佐々木広助、佐々木忠男、吉田知巳、水上ナツヨ、柳橋一子、斎藤千代子
整理 五十嵐一子、柳橋一子、田苗公明、及川恵子、佐藤由生子
調査指導 山形県教育庁文化課
事務局 事務局長 奥山龍璋（尾花沢市教育委員会社会教育課長）
事務局長補佐 柴崎英一（尾花沢市教育委員会社会教育課長補佐）
事務局係長 猪股義信（尾花沢市教育委員会社会教育課係長）
事務局員 吉田幸子（尾花沢市教育委員会社会教育課主事）

4. 採図縮尺は図下にそれぞれスケールで示している。本文・採図中の記号は、遺構にS、遺物にRを冠し、SK—土壙、SP—ピット、SX—性格不明遺構、RP—土器、RQ—石器とした。
5. 本報告書の作成は、大類誠が執筆し、採図・図版作成については、五十嵐一子、柳橋一子、及川恵子、佐藤由生子、田苗公明が補助した。本書の編集は、猪股義信・大類誠が担当した。

目 次

I 調査の経緯

1 調査に至る経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1

II 調査の概要

1 遺跡の立地と環境.....	4
2 遺跡の層序.....	6
3 遺構と遺物の分布.....	7

III 遺構と遺物

1 遺構	
1) 土壙・ピット.....	11
2 遺物	
1) 土器.....	13
2) 石器.....	27
3) 石製品.....	36
IV 総括.....	37

挿図目次

第1図 調査概要図	3
第2図 巾遺跡位置図	5
第3図 土層断面図	6
第4図 土器出土状況図	8
第5図 遺構・遺物の分布図	9
第6図 土壌・ピット図	12
第7図 土器拓影図（1）	16
第8図 土器拓影図（2）	17
第9図 土器拓影図（3）	18
第10図 土器拓影図（4）	19
第11図 土器拓影図（5）	20
第12図 土器拓影図（6）	21
第13図 土器拓影図（7）	22
第14図 土器拓影図（8）	23
第15図 土器拓影図（9）	24
第16図 土器拓影図（10）	25
第17図 土器拓影図（11）	26

付 表

付表1 巾遺跡発掘調査行程表（第2次）	2
---------------------	---

図版目次

図版1	石鏃・石錐	28
図版2	石小刀	29
図版3	籠状石器（1）	30
図版4	籠状石器（2）	31
図版5	搔・削器	32
図版6	磨製石斧	33
図版7	磨石・凹石	34
図版8	石棒・石冠・板状石製品	35
図版9	巾遺跡遠景	
図版10	調査風景	
図版11	遺構検出状況	
図版12	土層断面（上）・78号土壙（下）	
図版13	4号土壙（上）・5号土壙（中）・88号土壙（下）	
図版14	33号土壙（上）・46号暗渠（下）	
図版15	土器群の出土状況（1）	
図版16	土器群の出土状況（2）	
図版17	土器群の出土状況（3）	
図版18	土器群の出土状況（4）	
図版19	土器群の出土状況（5）	
図版20	土器群の出土状況（6）	
図版21	巾遺跡出土土器（1）	
図版22	巾遺跡出土土器（2）	
図版23	巾遺跡出土土器（3）	
図版24	巾遺跡出土土器（4）	
図版25	巾遺跡出土土器（5）	
図版26	巾遺跡出土土器（6）	
図版27	巾遺跡出土土器（7）	
図版28	巾遺跡出土土器（8）	
図版29	巾遺跡出土土器（9）	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

巾遺跡は、山形県尾花沢市大字細野字巾・カバ山に所在する。尾花沢市には数多くの遺跡があり、現在まで公に確認されたもので 176ヶ所の遺跡（註1）があり、機会あるごとにその数を増加させている。

今年度も巾遺跡の所在する細野地区が、新農業構造改善事業としては場整備事業にかかることになり、昨年の第1次調査に引き継ぎ、第2次調査を実施することになった。調査を2次に渡って実施したのは、農林課のほうは場整備事業との関連とともに、遺跡の範囲が広域に及び短年度での調査は困難であろうと考えられたからであった。これらの準備計画等にあたって、山形県教育庁文化課・尾花沢市教育委員会・尾花沢市農林課との間で協議を行い、2ヶ年計画による調査が組まれ、昨年度に第1次調査を、今年度に第2次調査を実施した。

※註1 山形県教育委員会が発行した『山形県遺跡地図』1978年では 100ヶ所の遺跡が『分布調査報告書(7)』1979年では、4ヶ所の遺跡が『分布調査報告書(10)』1983年では、72ヶ所の遺跡が発見され、現在まで 176ヶ所の遺跡が知られている。

2 調査の方法と経過

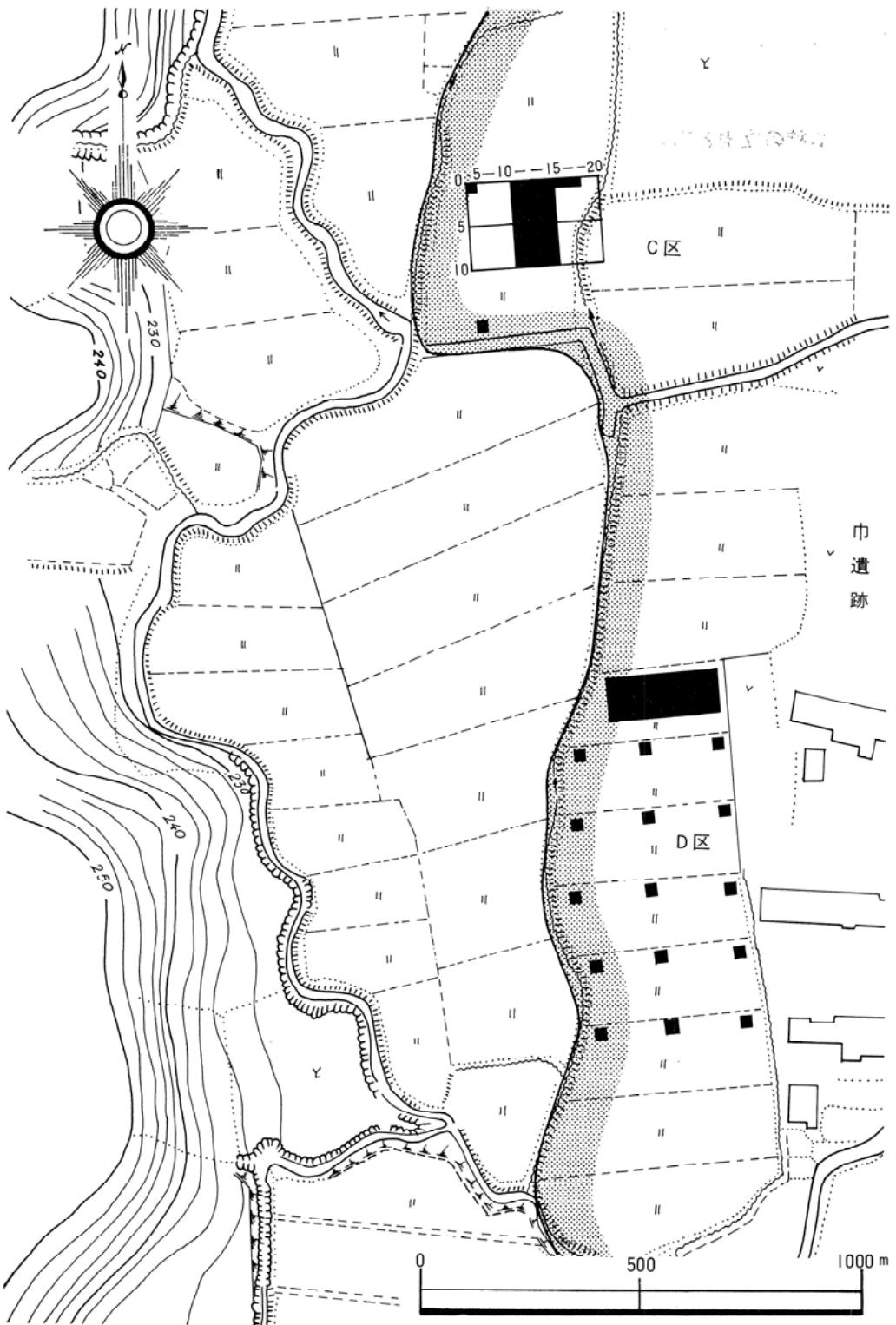
調査は農林事業との関連もあって、昭和58年8月17日から同年9月12日までの延べ20日間にわたって実施した。

昨年度の第1次調査は遺跡の北側が調査の対象となったが、第2次調査は南側が調査の対象となる。調査区にグリットを組む前に各所に 1m × 1m 程度の小グリットを任意に設定し、遺跡の遺存状況の把握につとめた。その結果、遺跡の北端にあたるD区に、遺物は僅かながら散見できる程度で、磨滅した土器片ばかりであった。文化層及び遺物包含層としての認識までにはいたらず、まとまった遺物のみられるC区を中心にして調査を進めることにした。なおC区・D区の名称は同一遺跡を2年にわけて調査していることから、遺跡の最北端調査区をA区、その南側をB区（ここまでが第1次調査）更にすぐ南側をC区・D区とした。

C区全体を10m × 10m の大グリットで覆い、東西軸をY軸、南北軸をX軸とする。さらに大グリットを2m × 2m の小グリットに分割し、調査の記録、遺物の取り上げ等はすべてこの小グリット単位で行った。グリットの名称は小グリット単位で、X・Y軸が各々交差する西北隅をもって行った。以下、調査の経過は付表1としてまとめた。

付表1 巾遺跡発掘調査行程表（第2次）

年月日		昭和58年			
調査内容		8月17日～21日	23日～30日	31日～9月4日	7日～12日
準備	資材運搬	■			■
準備	調査区設定	■	■		
粗掘	手掘り	■	■	■	■
粗掘	重機使用	■			
精査	面整理		■		■
精査	遺構検出		■	■	
遺構	土壙		■	■	■
遺構	ピット		■	■	■
遺構	土器精査		■	■	■
実測	遺構平面図実測			■	■
実測	土層断面図実測			■	
実測	遺物の微細図			■	■
写真	全体写真		■		■
写真	部分写真		■	■	■
整理	遺物洗浄	■	■		■
整理	注記		■		■
備考					



第1図 調査概要図

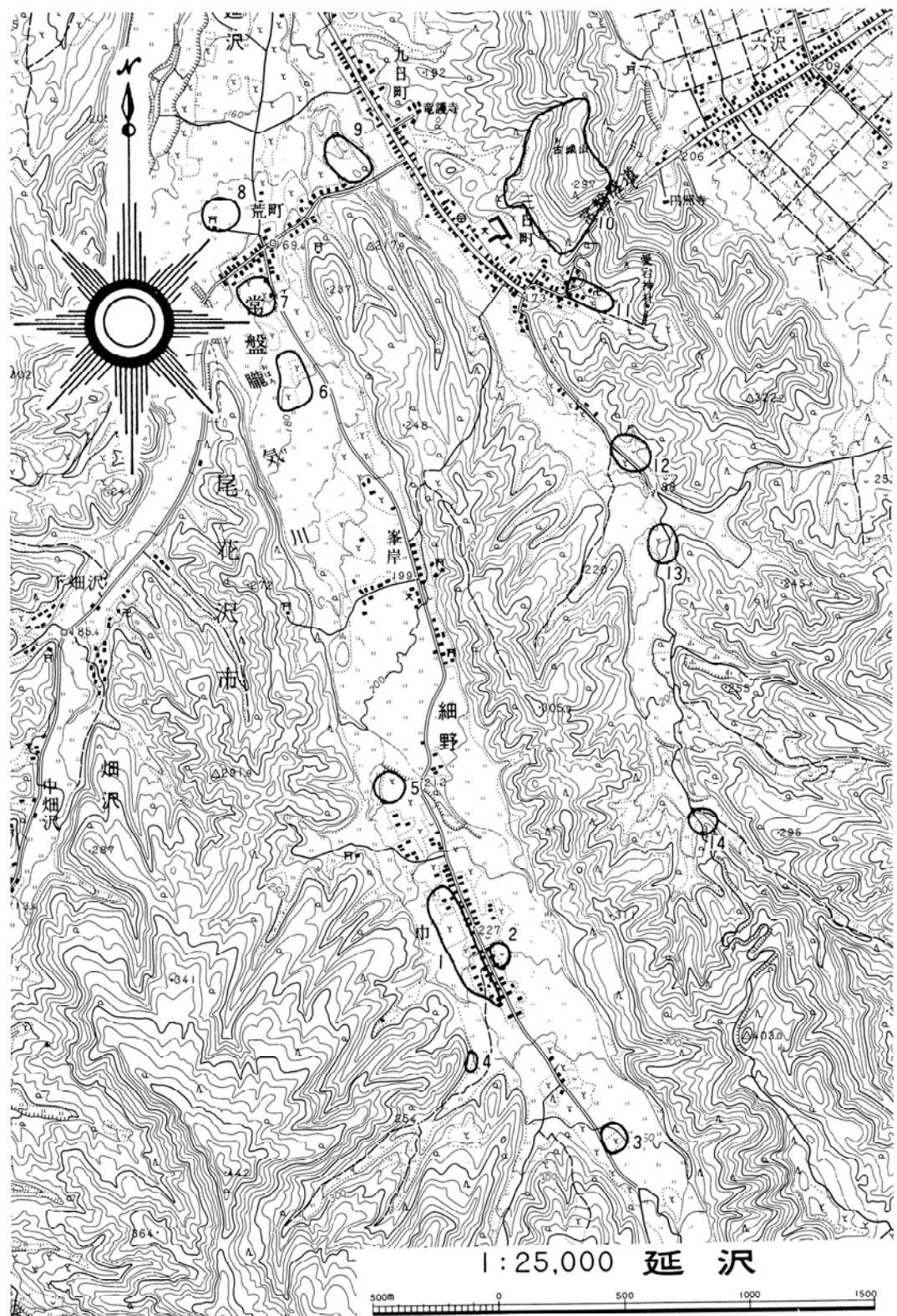
II 調査の概要

1 遺跡の立地と環境（第2図）

尾花沢盆地は、奥羽山脈から派生する山々が手足のようにのび、西流する最上川、またそれに注ぎ込む各支流は、各所に発達した河岸段丘や緩やかな丘陵を形成させ、ふところの深い盆地になっている。龍氣川によって形成された段丘上に占地する巾遺跡は、南北約500m、東西約100mという範囲が確認されている。

第1次調査で、埋甕や土壙が縁辺部で検出されたことにより、巾遺跡の範囲が現在集落が営まれている段丘と、それより一段低い段丘面にまで及んでいたことが明らかになり、第2次調査を実施するうえで、大きな指針となつた。

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	出土遺物等
1	巾遺跡	尾花沢市大字細野字巾・カバ山	繩文時代 (中期)	水田 畠地	第1・2次調査参考のこと
2	巾東遺跡 (仮称)	尾花沢市大字細野字巾	繩文時代 (中期)	畠地	繩文土器 籠状石器
3	川前遺跡 (仮称)	尾花沢市大字細野字川前	繩文時代 (早期・中期) 弥生時代	畠地	繩文土器 弥生土器(蓋)
4	滝ノ沢遺跡	尾花沢市大字細野字滝ノ沢	繩文時代 (中期)	畠地 水田	繩文土器
5	河原遺跡	尾花沢市大字細野字河原	繩文時代	畠地	繩文土器
6	熊原遺跡	尾花沢市大字延沢字熊原	繩文時代 (中期)	畠地 水田	繩文土器 フレイク
7	荒町遺跡	尾花沢市大字延沢字荒町	繩文時代 (後期)	畠地 水田	繩文土器
8	大明神遺跡	尾花沢市大字延沢字大明神	繩文時代 (中期)	畠地 水田	繩文土器・石鎌・磨製石斧
9	向山遺跡	尾花沢市大字延沢字向山	繩文時代 (前・中期)	畠地 荒地	繩文土器
10	野辺沢城跡	尾花沢市大字延沢	鎌倉 室町時代	山林	
11	坊の入遺跡	尾花沢市大字延沢字坊ノ入	繩文時代	畠地	繩文土器
12	カマツ坂遺跡	尾花沢市大字延沢カマツ坂	繩文時代	畠地	繩文土器
13	田ノ沢遺跡	尾花沢市大字延沢	繩文時代 (中期)	畠地	繩文土器 フレーク
14	宮田原遺跡	尾花沢市大字鶴子	繩文時代	畠地 水田	繩文土器



2 遺跡の層序（第3図）

精査したC区の層序は、第1次調査で精査したB区のすぐ南側ということもあって、基本的なところはほとんど変わらないようである。しかし、二次堆積の土砂が厚く堆積し、つきかためられたりするなど攪乱がみられ、また文化層と認識された層も削平され薄くなっていたり破壊が目立った。その中でも比較的遺存状態の良好な14—10G北壁の土層断面をもって代表したい。

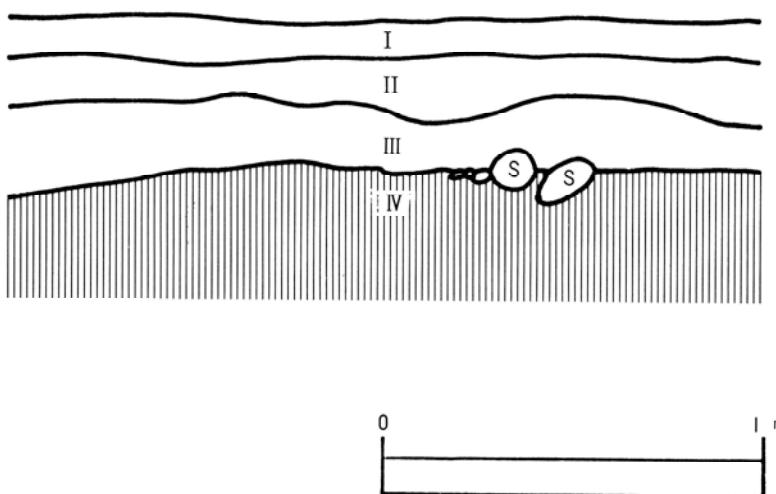
第I層（茶褐色土） 耕作土で下部に磨滅した土器片を含み、厚さ10~15cmである。

第II層（濁黒褐色土） 非常に固い層で、砂礫を多く含みザラザラする。所々に黄褐色粘土がレンズ状に、あるいは、黒色土と交互に堆積する状態がみられた。磨滅した土器片を多く含む。厚さ10~30cmとはばがあり、河川に近いところほど厚く堆積する（二次堆積の床土）。

第III層（暗茶褐色土） 細かい炭化物や礫を含み、砂質性に富むものの粘性がある。良好な遺物を多く含む。厚さ5~10cmである。

第IV層（黄褐色粘質土） 砂質性に富むが、締りがある。この上部に遺物がわずかにみられ、遺構はこの面を掘り込むものが多い。

遺物包含層は第III層と考えられる。D区は第I層（茶褐色土）、第II層（暗茶褐色土）、第III層（濁黒褐色土）、第IV層（黄褐色粘質土層）の層序が基本で、第III層が厚く堆積し、広範囲にみられ、遺物は散見できる程度であった。



第3図 土層断面図

3 遺構と遺物の分布（第4・5図）

第2次調査で検出された遺構は、土壙、ピット、暗渠などである。暗渠は、この水田を整地した時というから最近のものであろう。土壙とピットは縄文時代のものと考えられるが、これら遺構内から出土した遺物は少ない。

遺構と遺物がみられたのは、10~14-0~4大グリット内で、その南側の大グリットからは少量の遺物が出土しただけで遺構は検出できなかった。これらの分布状況をみると、南北に帶状に分布するようである。これは第1次調査と同様な状況であり、第1次調査の南端と第2次調査の北端がほぼつながるようで、一連のものと考えられる。

遺構と遺物がみられなかつた東側と西側は、第1次調査でもみられたように、東側が1m以上も削平されたところで、西側は急激に傾斜する斜面である。

土器の出土状況は、破片が圧倒的に多いが、口縁部（R P37, 42, 44, 61, 68）、胴部（R P64）、底辺部（R P47, 66）、或いは、一個体分（R P43, 62, 63, 65, 69, 70, 71）などにある程度まとまつた形で出土する。スクリーントーンで示したのがそれである。a・b群というように土器の集中するブロックがみられる。R P43のように明らかに土壙とからむ例を除いては土器だけが集中する。

特に、一個体がまとまって出土した土器を観察すると、いずれも横倒しの状態で7個体分が確認できた（型式は大木8a式と考えられる）。R P68~71の土器の上下関係を、古い方から順に示すと、R P68→R P71→R P70→R P69という重なりがみられた。R P68はR P65の下から出土した。残念ながら、これらの土器は細片に割れておりR P65・69・70等の復元は困難をきわめるが、R P62・63が可能である。これほどまでに遺存状態が悪いのは、包含層が削平され、かろうじて難を免れたものの、水田耕作のため土圧を長年うけ、このような状態になってしまったものと考えられる。

a群とb群の間にS X32とした遺構は、風倒木の一部を調査したものだが、12-1Gに黄褐色粘土のマウンドがみられ、それを囲むようにして不規則な黒褐色土がみられた。土層を観察すると、黒褐色土が薄くなりながら黄褐色土の下に深くはいり込み、やがて消えて行く様子がみられた。この黒褐色土のなかからは、良好な土器片が多数出土したが（図版18の下の土器など），これは、かつてa群やb群（第4図）のような状態の土器群があり、木が倒れる際、これらの土器群をまき込んで埋没してしまったものと考えられる。この周辺に土器群がみられないのは、以上のような事情があったものと考えられる。



第4図 土器出土状況図



第5図 遺構・遺物の分布図

III 遺構と遺物

1 遺構(第6図)

1) 土壙・ピット

検出された遺構は、土壙12基、ピット4基などであり、いずれも縄文時代のものと考えられる。以下代表的なものを略述してゆく。

3号土壙(SK3) 11~12—3~5Gで検出した。全体的に長楕円形を呈し、長径310cm、短径170cmを測る。覆土内からは多数の礫が出土した。a—bラインでわかるように、東側に高低のしっかりした段がある。土器は大木8式のものが少量出土した。

4号土壙(SK4) 10~11—4Gで検出した。ほぼ円形を呈し径65cmを測る。覆土が3層に分かれ、2、3層から大木8式の土器片が出土した。

5号土壙(SK5) 10—4~5Gで検出した。楕円形を呈し、長径143cm、短径95cmを測る。覆土4層に分けられ、2~4層中から大木8式の土器が出土した。

SK4とSK5の切り合いは不明だが、SK4はSK3を切っている。

77号土壙(SK77) 10—2~3で検出した。RP43を含む土壙で底面近くから底部が出土し、土器埋設土壙ないしは埋甕の可能性がある。ほぼ円形を呈し、長径65cmを測る。

78号土壙(SK78) 10~11—3Gで検出した。長楕円形を呈し、長径100cm、短径48cmを測る。底面に5個の礫が配されていた。地文に斜行縄文を施した土器片が出土した。

80号土壙(SK80) 10~11—3Gで検出した。瓢形を呈し、長径96cmを測る。覆土は2層に分かれ、第1層に礫を含む。土器は出土しなかった。

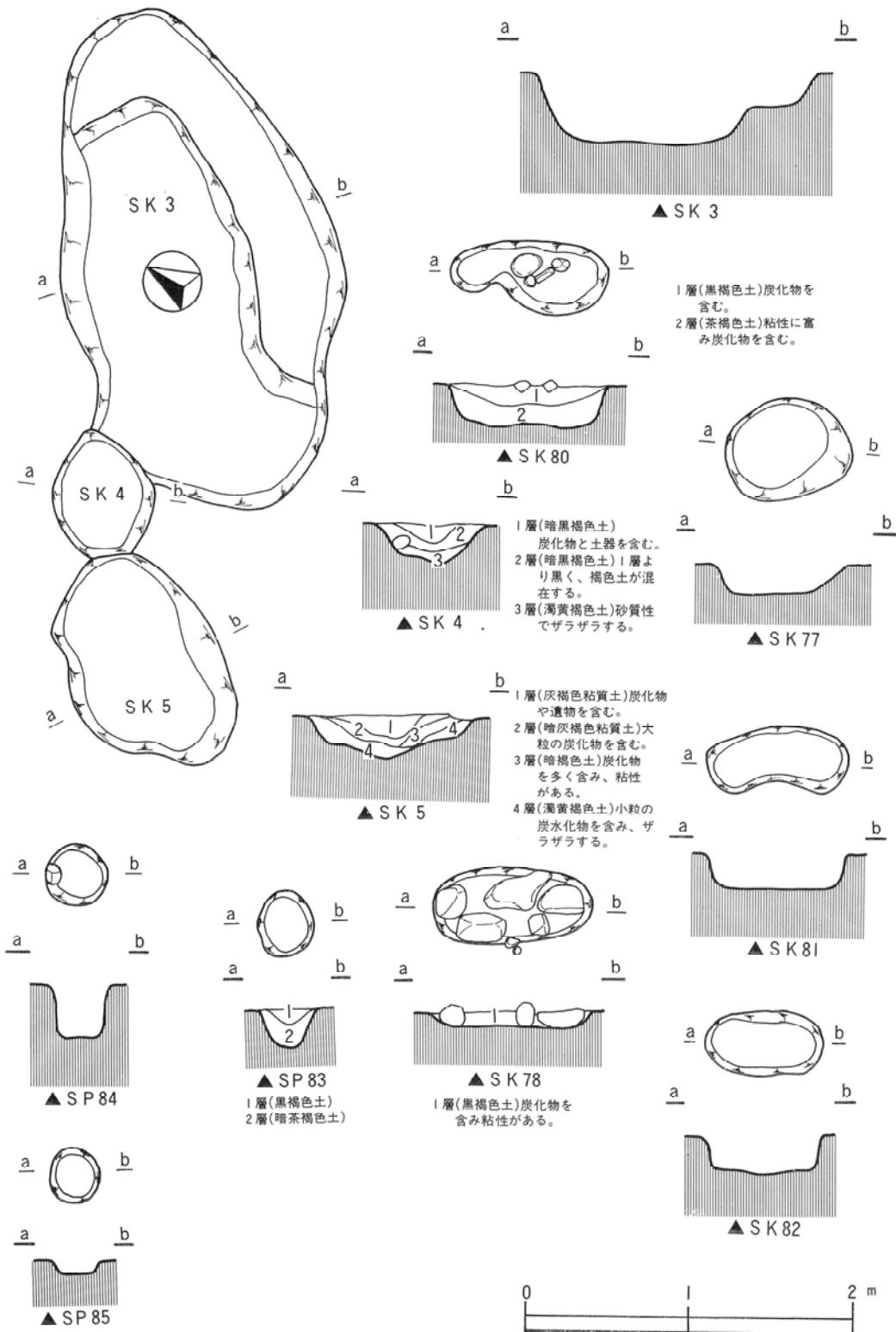
81号土壙(SK81) 10—4Gで検出した。軽く「く」字状を呈した楕円形の土壙で、覆土からは遺物は出土しなかった。

82号土壙(SK82) 11—4Gで検出した。長楕円形を呈し、長径73cm、短径40cmを測る。遺物はみられなかった。

83号ピット(SP83) 12—3Gで検出した。円形を呈し、径35cmを測る。覆土が2層に分けられ、2層から地文に斜行縄文を施した土器片が出土した。

84号ピット(SP84) 11~12—3Gで検出した。円形を呈し、径40cm、深さ32cmを測り上部に礫が出土した。

85号ピット(SP85) 11~3Gで検出した。円形を呈し、径30cmを測る。底面から地文に斜行縄文を施した土器片が出土した。



第6図 土壌・ピット図

2 遺 物

1) 土 器

第2次調査で出土した土器は、整理箱にして16箱分に相当する。縄文時代前期と中期のもので、主体は中期である。前期は数点出土したにすぎない。さきにも述べたように、土器のほとんどが細片になっているため、復元・接合等の整理が十分でなく、今後とも継続してやらなければならないが、以下、施文技法・文様モチーフ・文様要素等から分類し略述してゆく。

第I群土器（縄文時代前期）（図版23、1～3）

胎土に植物纖維を含むいわゆる纖維土器である。現在まで3点確認している。磨滅が著しく、小破片のため全体の器形は不明である。

1類（1） 口縁部片で、横位にループ文が帶状に施文されている。

2類（2～3） 斜行縄文が施文されたものと考えられるが、或いは、羽状縄文をもつ破片の一部の可能性もある。2はLR単節縄文、3はRL単節縄文である。

第II群土器（縄文時代中期）（第7図～第17図）

撚糸圧痕文、沈線文、刺突文、粘土紐貼付文、隆起文等の各種の文様施文技法・文様要素が単独、或いは、組合せによって構成されたものを本群とした。

1類（1～3） 撥糸圧痕文を主体とした土器群である。器形は、口縁部がかるく内湾し、頸部がくびれ胴部の張るものと、口縁部が外反する深鉢形土器と考えられる。撚糸圧痕文は口縁部に多く見られ、ほぼ等間隔施文された縦位の圧痕文が横位に帶状に巡らすもの（1・2）。口唇部直下の狭い粘土紐貼付文間に短線の圧痕文を巡らすもの（3）などがある。1は口唇部直下の波状の粘土紐貼付文上に圧痕文を施文している。地文にRL単節縄文、撚糸圧痕文はRL単節縄文を用いている。

2類（4） 口唇部直下に円形刺突文、その下位に短い沈線文・連弧文を配したもので口縁部が外反する深鉢形土器と考えられる。

3a類（6・8・24・32～41・47） 粘土紐貼付文を主体とし、調整があまり加えられていないものである。器形は、口縁部が内湾し頸部でくびれ、胴部が円筒形のもの（34）、口縁部が外反するもの（33・35）などがある。口縁部ないしは頸部に平行した2本の粘土紐貼付間に波状の粘土紐貼付文を施すもの（24・33・37）、垂下させるもの（39・41）などがある。また渦巻文（39・47）、十字形文（24・35・39）、方形文（34）などもみられ、これらが組合せられている。6・8は口唇部直下に波状の粘土紐貼付文がみられ、特に6は貼付文の上にまで縄文が施される。地文にRL単節斜縄文が多用されている。

3b類(42~46・48・51・53・56・58) 粘土紐貼付文を主流としながら、沈線文を合わせ持つものである。器形は、口縁部が内湾し、頸部でくびれ胴部の張る深鉢形土器で、いわゆるキャリバー形を呈する。粘土紐貼付文は、口縁部に集中し、渦巻文(42・43・56)同心円文(51)などがみられ、粘土紐側沿に沈線が走る。この沈線は粘土紐を貼付けるための調整と考えられる。頸部は研磨された無文帶(42・44)をなし、胴部以下は沈線文で文様が構成される特徴を持つようである。概して中型から小型の土器が多い。56は小突起をもつ。

3c類(18~23・31・45・46・49・91・92・95・96・99・100) 粘土紐貼付文を主体にし、沈線文がみられるものである。3b類に比べて大型の土器が多く、粘土紐も太目のものが用いられている。器形は、口縁部が内湾し、頸部で弱いくびれをもち胴部が張り気味のもの(45・46・49)、口縁部が外反気味で、頸部のくびれや胴部の張りが弱いもの(31)などがある。粘土紐貼付文の調整は、その側沿に単に沈線を引くもの(19・22・23・45・46・49)、粘土紐を研磨したもの(18・20・49・49・91・92)。

文様は、渦巻文(19・20・22・91・95・96)、十字形文(21・31)、方形文(92)、懸垂文(18・20・23・99)などが頸部や胴部に施文される。31は口唇部に短線撚糸圧痕文と「S」状の粘土紐貼付文がみられる。

23は粘土の繋ぎ目がよく調整されていないため、土器製作の工程がわかるものである。

96・99・100は同一個体で、粘土紐が剥がれているため、文様の施文工程がわかるものである。地文に繩文施文→粘土紐の貼付け→粘土紐側沿を沈線で調整→沈線文で文様施文という工程がわかる。

4類(5・9・25・98) 粘土紐貼付文の上に指頭や刻み目などが施されたものである。

粘土紐貼付文は、口唇部直下ないしは口縁部にみられ、その上に短線を刻んだもの(5)指頭を圧したもの(9)、籠状工具で刻んだもの(98)などがある。

5類(15・16・26・28・29) 地文に斜行繩文を施文するだけで、他の文様がみられないものである。口縁部が内湾するもの(26)、外反気味のもの(28)、外湾するもの(29)などがある。26はR L R複節斜行繩文で、15・16・28・29はL R单節斜行繩文である。

6a類(10~14・59・61~63・66・67・69~85・87~89・93・94) 沈線文で文様が構成されるものである。器形は、口縁部が外反ないしは内湾し、頸部が弱くくびれ胴部が円筒形を呈する深鉢形土器と考えられる。

文様は頸部や胴部に展開し、渦巻文(63・66・67・70・73・83・88・93)、十字形文(17・75)、クランク文(10)、円弧文(11)、波状文(13・61・62)、懸垂文(14・76~79・81・83)などがみられる。2~3本単位の沈線文が多く、地文にはLR单節斜行繩文が多用されて

いる。17の施文具が半裁竹管の内例で引いたような沈線で、90は地文が無文である。

6b類(27・50・57・58・60・64・65・86) 沈線の渦巻文・懸垂文などの文様で構成され、いわゆる「フ」字状の棘文を呈するものである。

器形は、口縁部が外反し頸部でくびれ、胴部の張る深鉢形土器と考えられる、肥厚した口唇部に横位の渦巻文を配し、頸部が研磨された無文帶となる。また、胴部との境を3本以上の沈線で区切るものが多い。

7類(30) 肥厚した口唇部に「S」状の隆起文を配し、胴部は研磨された無文帶となるもので、浅鉢形土器と考えられる。

8類(101~104・106) 隆起文で文様が構成されているものである。隆起文は丁寧に研磨され、断面が三角形を呈するもの(101・103・104)がみられる。口縁部や胴部に肉厚の隆起文によって渦巻文(101・103・104)や、円文(106)などが表出される。

9類(97・105) 文様が磨消繩文で構成されるものである。小破片のため、器形や具体的な文様は不明瞭だが、楕円形など区画繩文や渦巻文で構成されるもの(105)、断面三角形の隆起文で構成されるもの(97)が認められる。

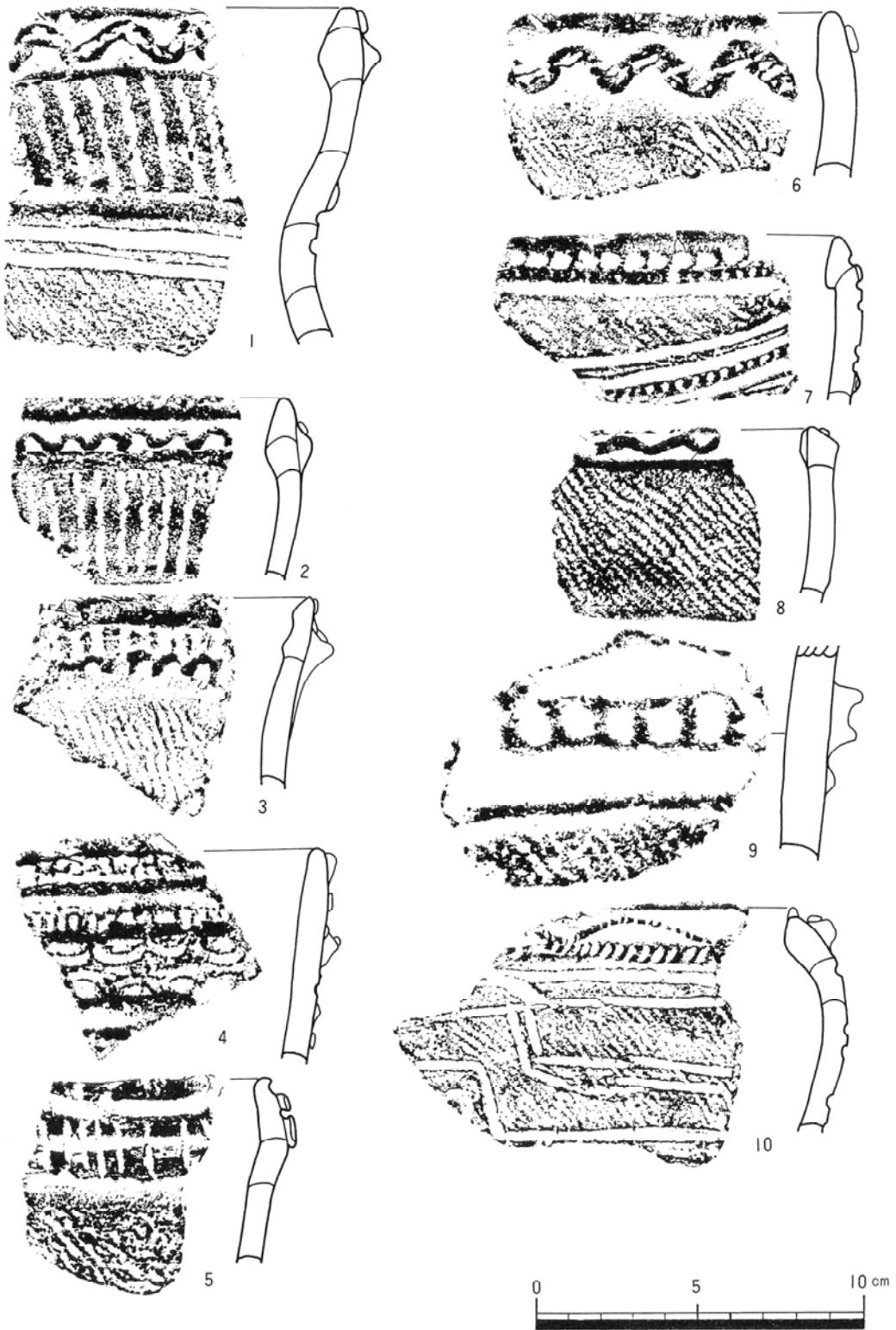
その他、網代痕を有する底部が多く見られた(107)。

完形土器(第16・17図)

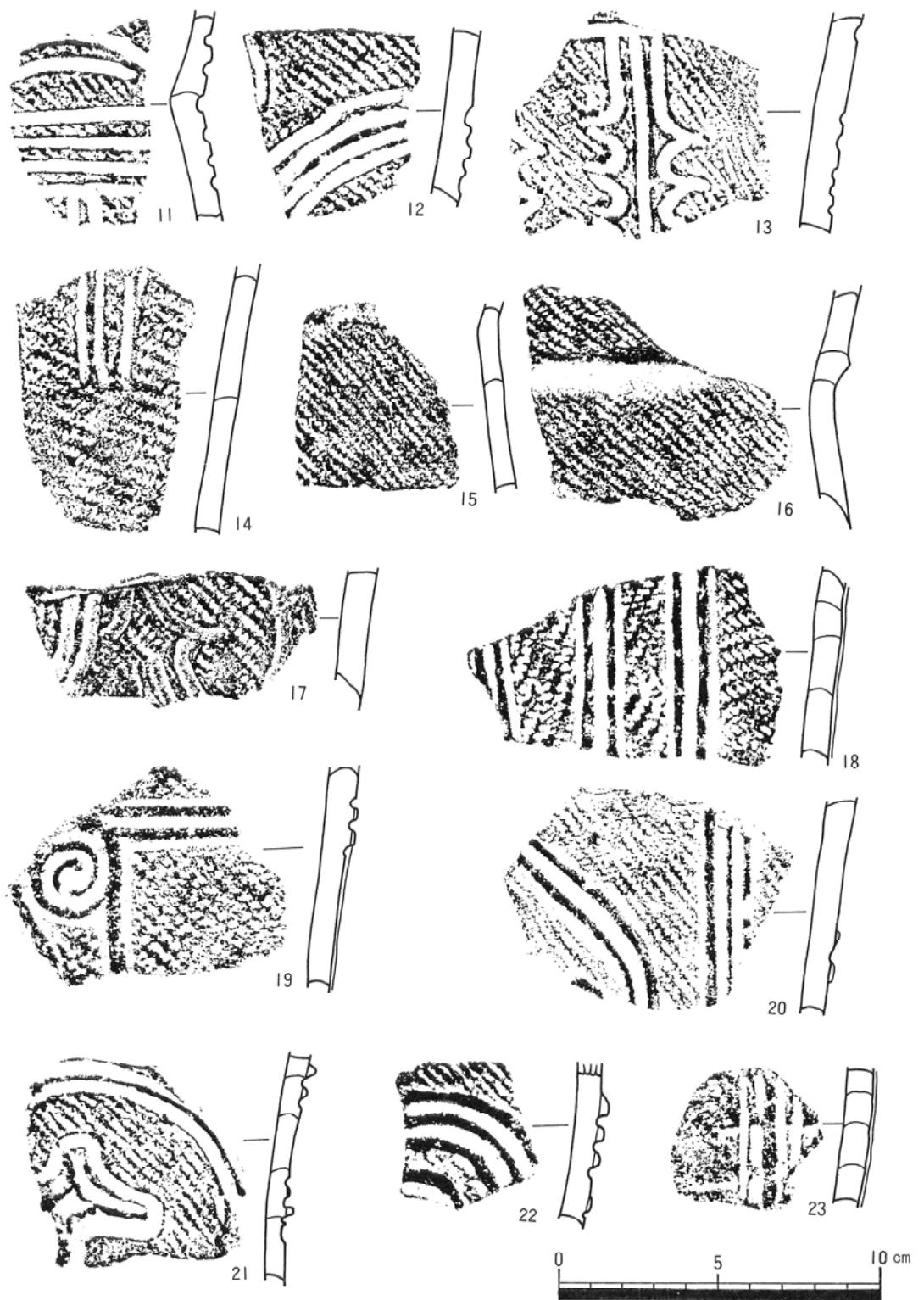
108は13-1G(S×87上面)から出土した。胴部上半を失う。現存高13.5cm、底径12.3cmを測る。地文にL.R单節斜行繩文が施文されている。3本単位の沈線で懸垂文、円弧文、渦巻文等の組合せで文様が構成される。2単位区画の文様構成で6a類に含まれる。

109(RP63)は、11-2~3Gから出土した。底部の大半を失うが、口縁部・胴部が良好に残っている。器高28.9cm、口径22.8cm、推定底径12.0cmを測る。口縁部がゆるく外反し胴部は円筒状になる深鉢形土器である。

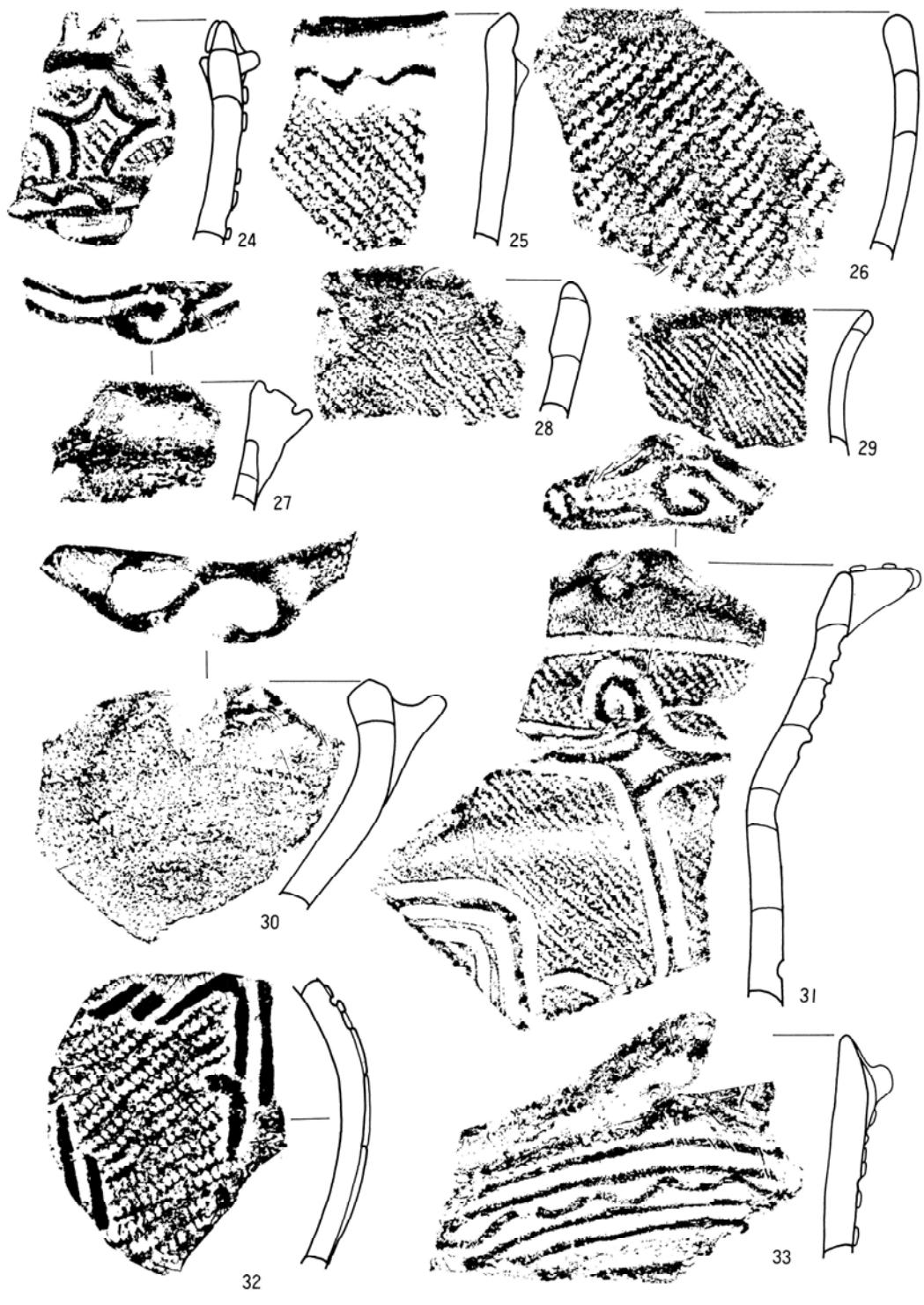
口縁に2個一対の小突起が4ヶ所に付き、口唇部には波状の粘土紐貼付文がみられ、更にその上には繩文が施文されている(ただし、一部に認められる)。口縁部には平行した粘土紐貼付文がみられ、2本の指で摘むようにして刻み目が施されている。胴部にはLR单節斜行繩文が施されている。



第7図 土器拓影図(1)

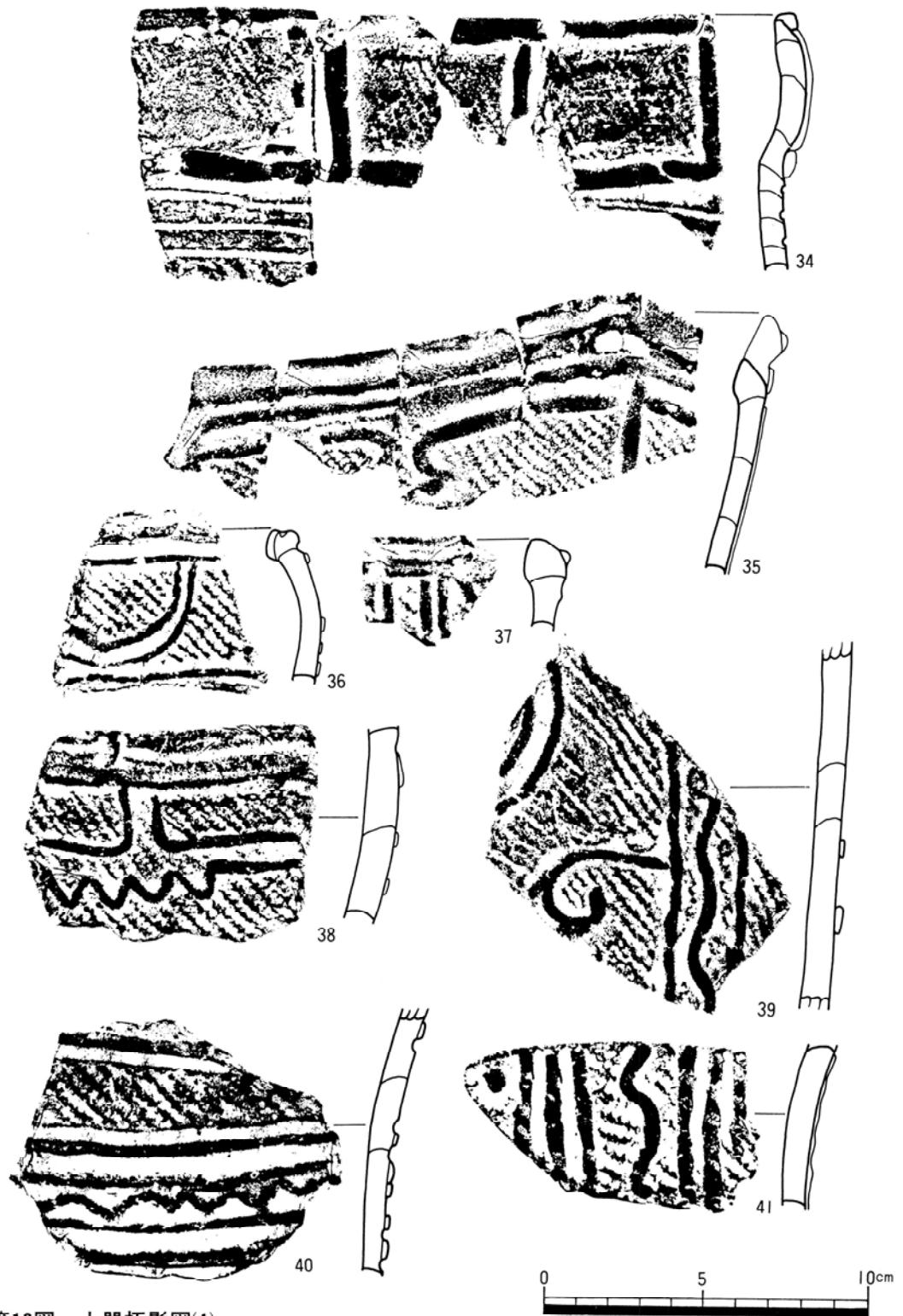


第8図 土器拓影図(2)

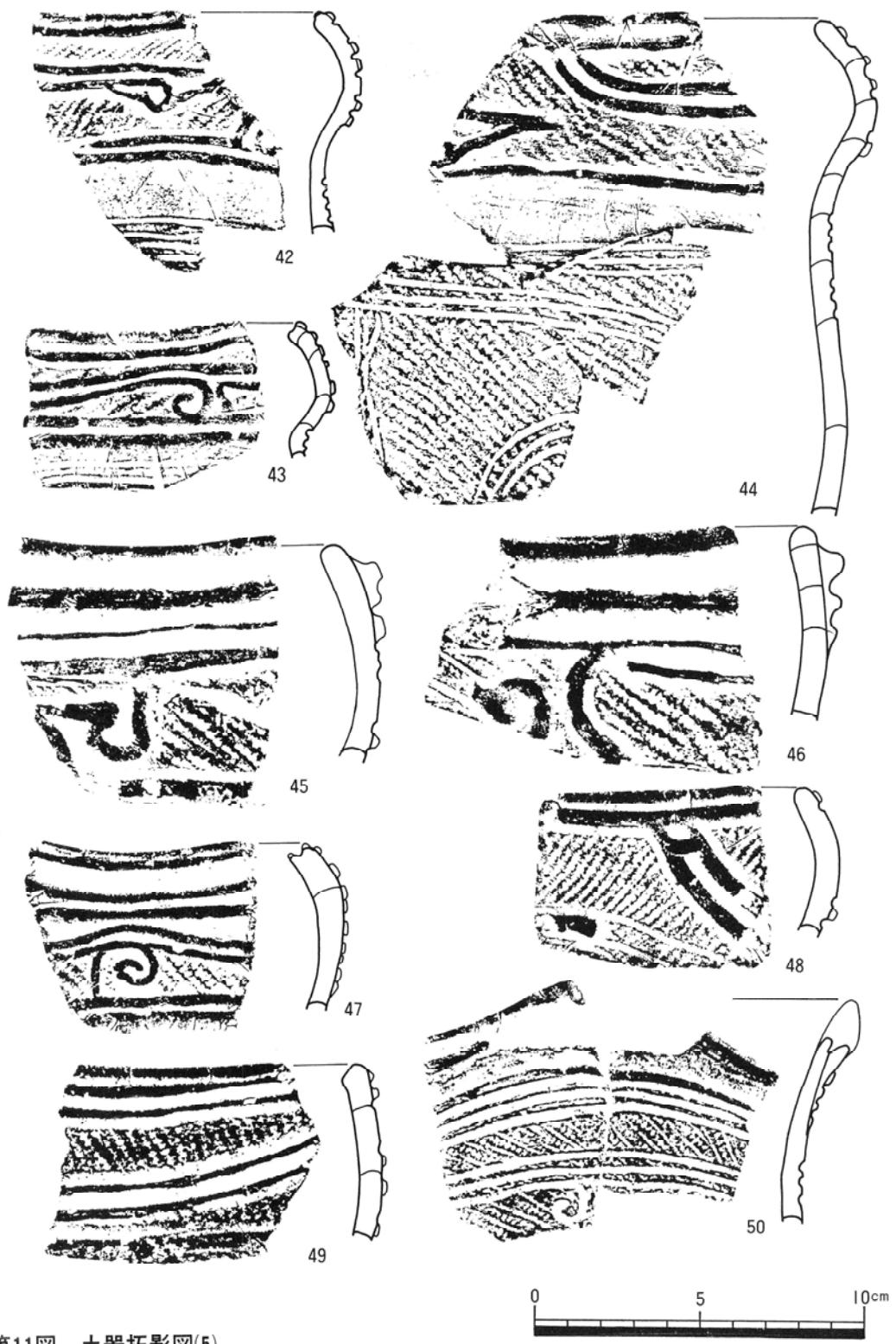


0 5 10cm

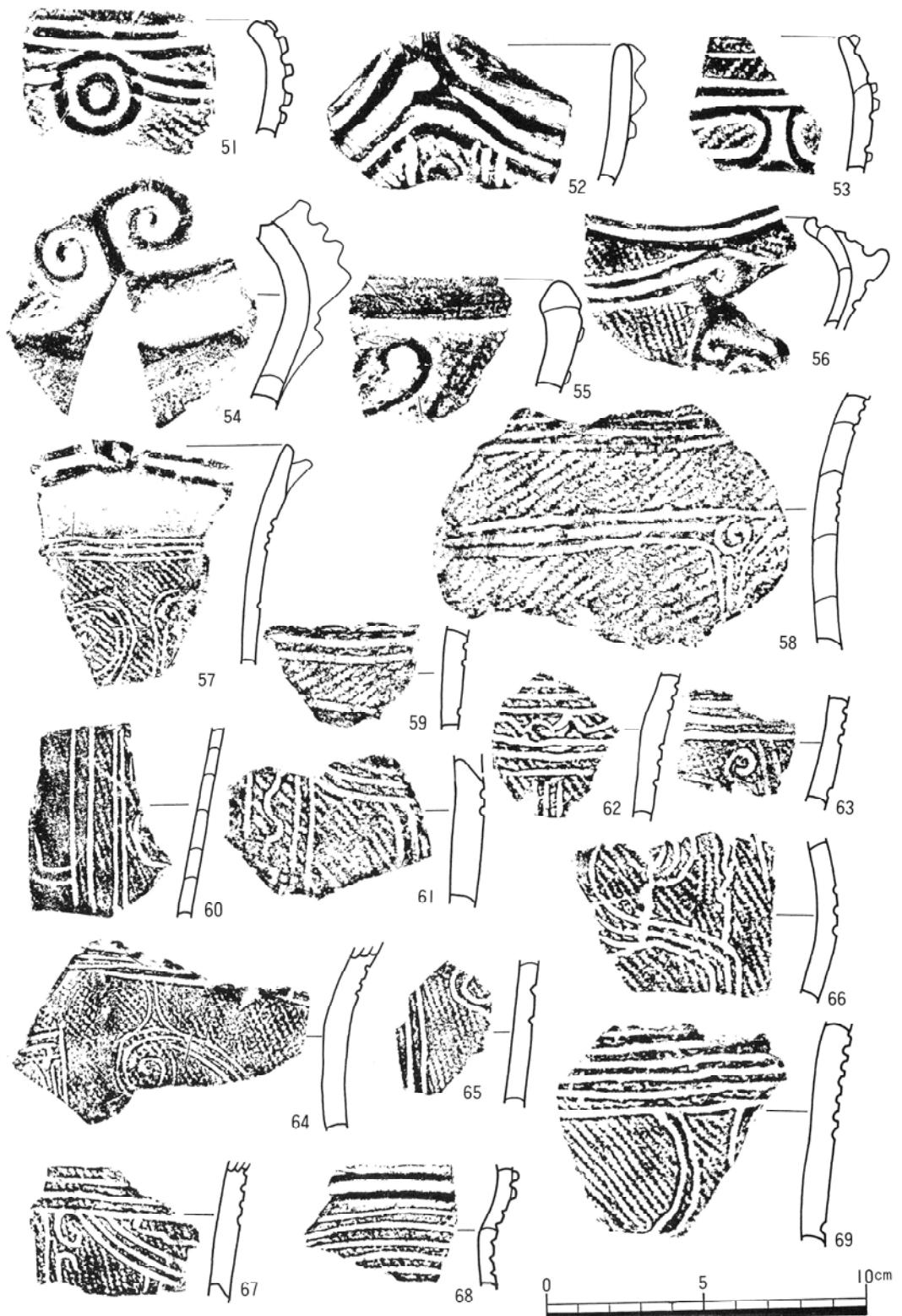
第9図 土器拓影図(3)



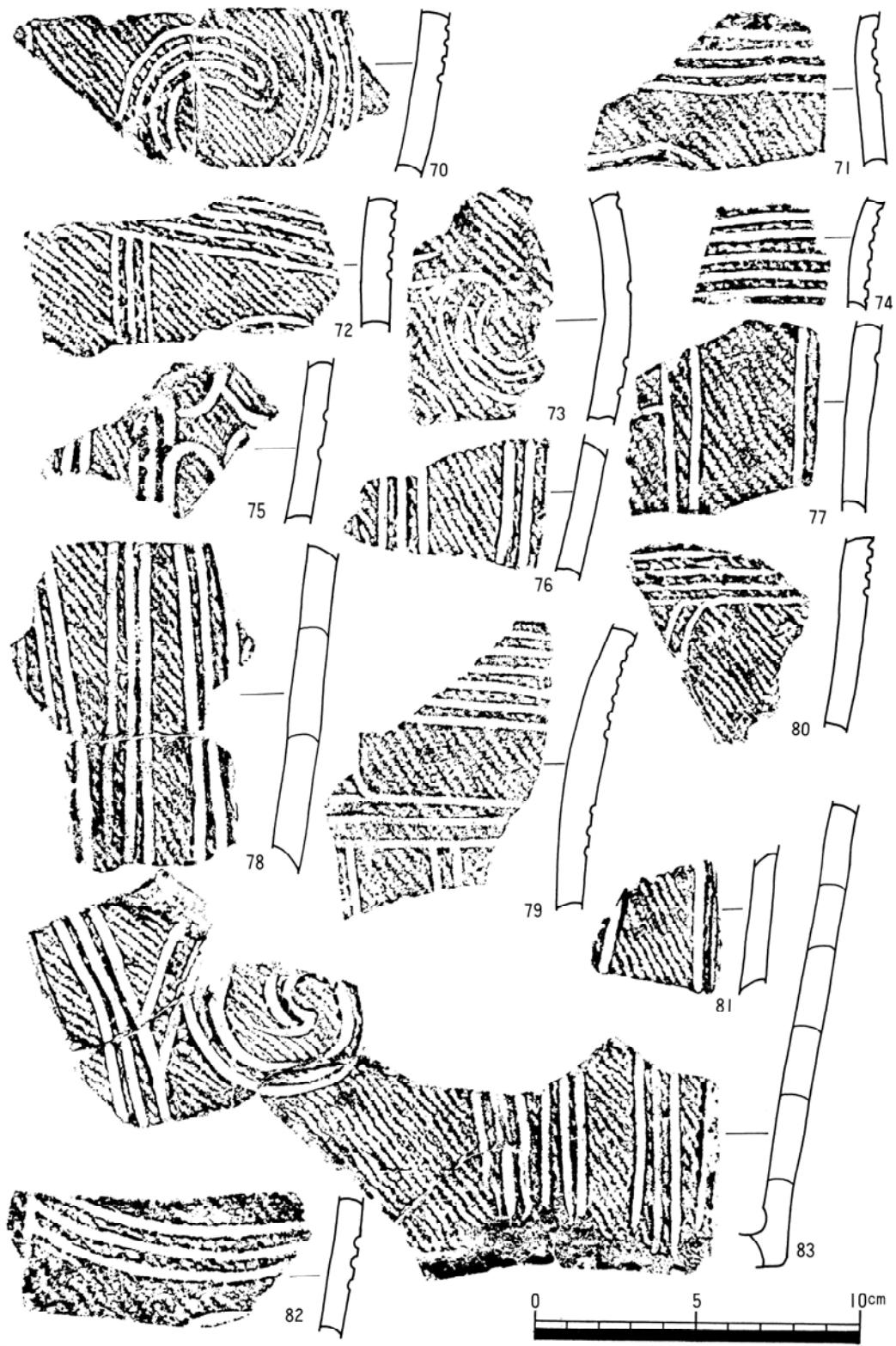
第10図 土器拓影図(4)



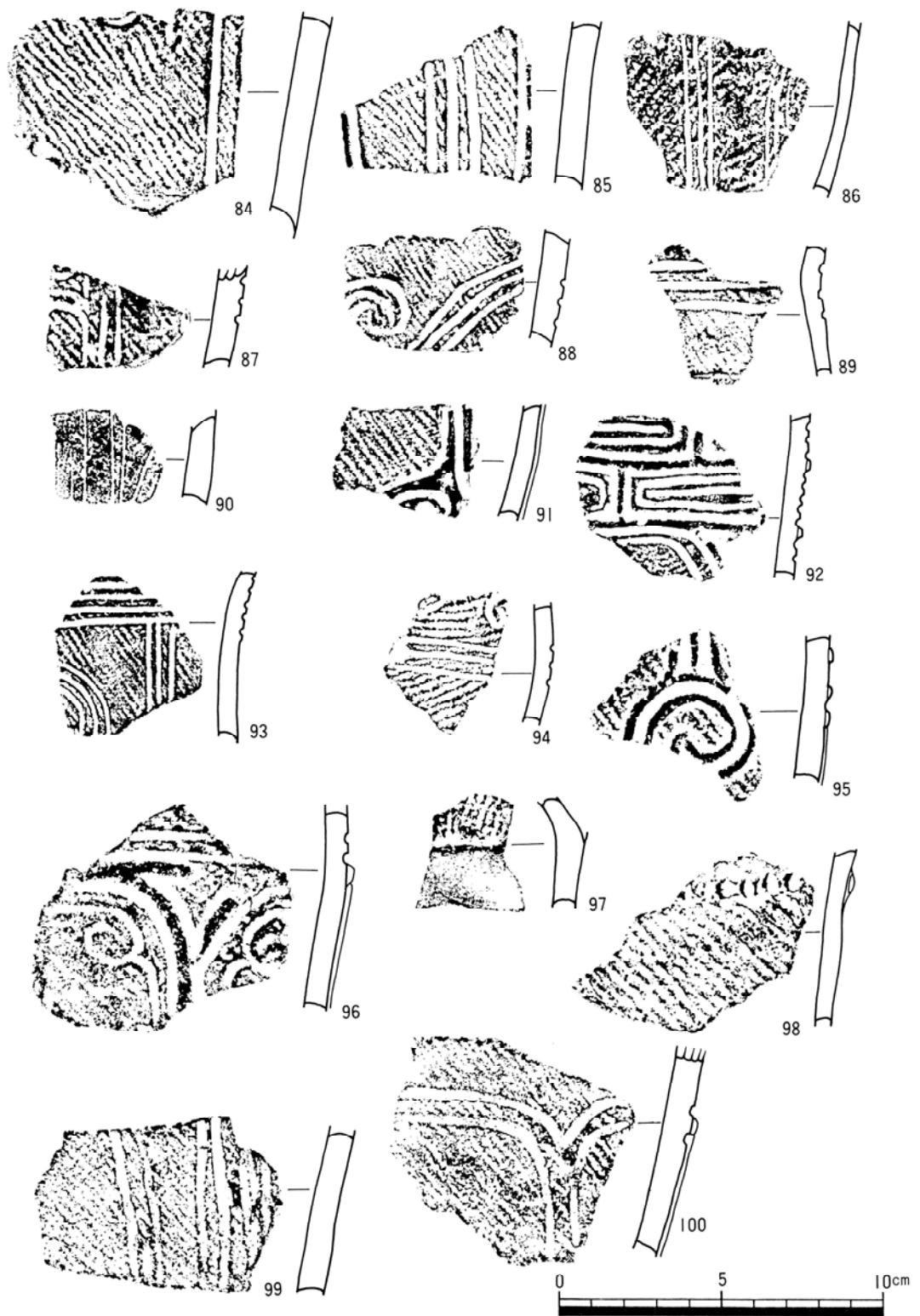
第11図 土器拓影図(5)



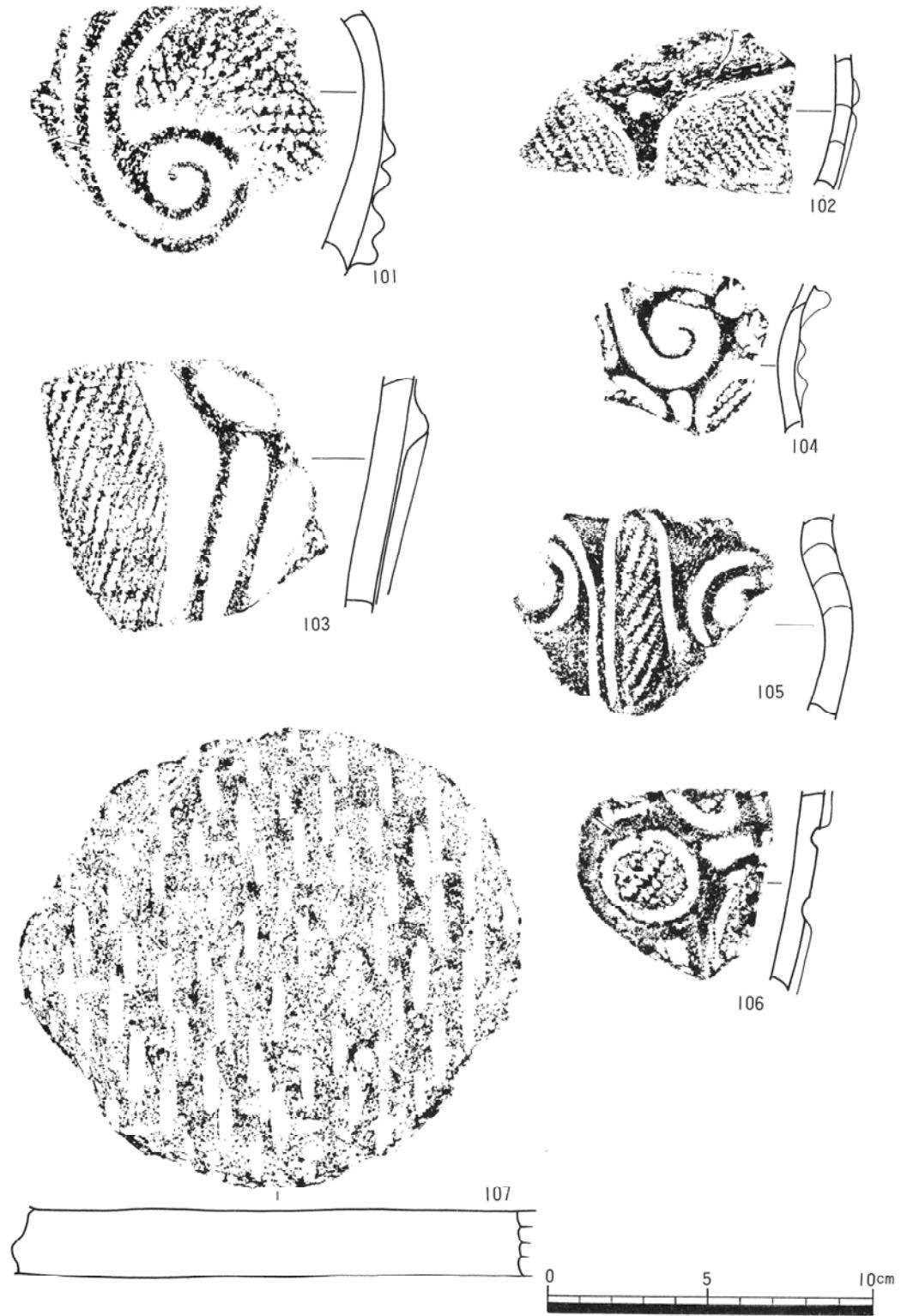
第12図 土器拓影図(6)



第13図 土器拓影図(7)



第14図 土器拓影図(8)



第15図 土器拓影図(9)

10cm
5
0



第16図 土器拓影図(10)



第17図 土器拓影図(1)

2) 石器

第2次調査で出土した石器類は、整理箱にして約3箱分である。その内訳は、石鎌6点、石錐6点、石小刀9点、搔・削器20点、籠状石器26点、磨製石斧5点、磨石18点、凹石14点、石皿1点、石棒1点等である。以下略述してゆく。

石鎌（図版1, 1~6）

全部で6点出土した。形状から3分類する。

- a類（1）二等辺三角形を呈し、抉りをもたず基部や側縁部が直線的に成形されたもの。
- b類（4）二等辺三角形を呈し、基部に浅い抉りをもち脚部が外側に突き出しているもの。
- c類（2・3・5・6）脚部が基部へ向かって丸く調整され、基部に「U」字状の深めの抉りを持ち、全体の形状がハート形をなすもの。

石材は1・2・4・5が頁岩、3が玉髓、6が黒曜石である。

石錐（図版1, 7~10）

全部で6点出土した。全体の形状から2分類して示す。

- a類（7・8・10）全体の形状が棒状を呈したもの。7は全面に調整加工が施され、基部が丸味を持ち、錐部と基部とがあまり明瞭ではない。10は半月形を呈したものだが、この仲間として扱った。両端に錐部を作出し、全面に調整加工が施されている。明瞭な磨滅痕が観察でき、錐部の先端を欠いた後も使いこんでいる。3点とも錐部の断面が菱形をなす。
- b類（9）細長い錐部が明瞭にみられ、基部が素材の剥片の形状を溜めたものである。錐部の断面が三角形をなす。

石小刀（図版2, 1~8）

一端につまみ状の突起を作出し鋭利な刀を持つ打製石器で、9点出土した。その中で完形品は7点である。欠損したものは2点で、1つはつまみ部から刃部中ばまで失ったもので、もう1つは刃部の一部を失ったもの（2）である。

- a類（3~8）つまみ部に対して刃部が平行するいわゆる縦型の石小刀であるが、刃部が斜行する仲間もこの中にいれた。主要剥離面側を観察すると、いずれもつまみ部は打痕を加工して作出し、縦長の剥片を使用している。石材は頁岩製である。

- b類（1・2）つまみ部に対して刃部が直行するいわゆる横型の石小刀である。縦型の石小刀と同様につまみ部は、打瘤を加工して作出している。石材は頁岩製である。

搔器（図版5, 3~7・9・10）

剥片の先端あるいは周辺に刃部を形成する一群である。形態から3分類できる。



図版1 石鎌・石錐

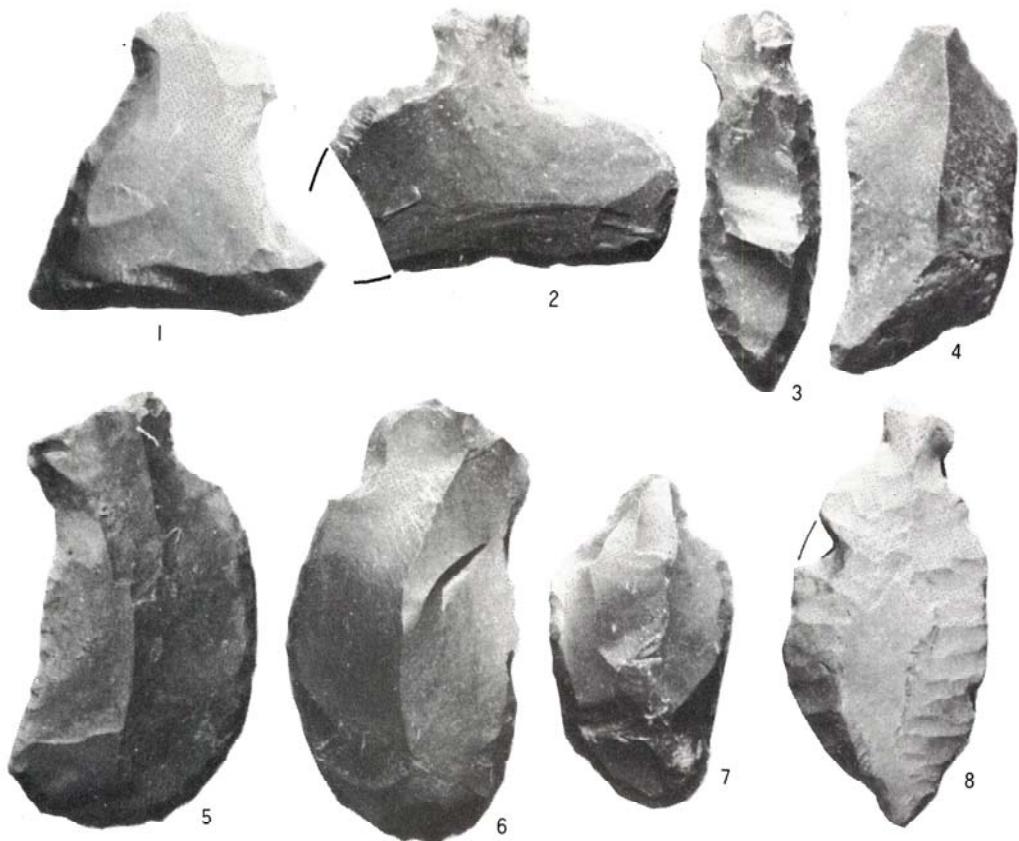
a類（3・4・6・9） 片面加工を基本とし、剥片の先端に入念な剥離がくわえられ、鋭利な刃部を形成する。形は全体的に洋なし形を呈した定形的な搔器である。石材は頁岩製が多い。

b類（5・7） a類と同じような刀部をもち、素材となった剥片をそのまま生かしたものである。

c類（10・11） 縦長剥片の先端に鋭利な刃部を形成するものである。

削器（図版3，1・2・8） 縦長剥片あるいは横長剥片の側辺に入念な剥離を加え、刃部を形成し片面加工を基本としている一群である。割と大型のものが多い石材は頁岩製が多い。

1は横長剥片を使用した削器で、1a面左側（基部）にブランディング（刃潰し）を施し、右側に鋭利な刃部をつくりだしている。8は縦長剥片の側辺に刃部を形成するものである。



$S = (1 : 1)$

図版2 石小刀

籠状石器（図版3・4）

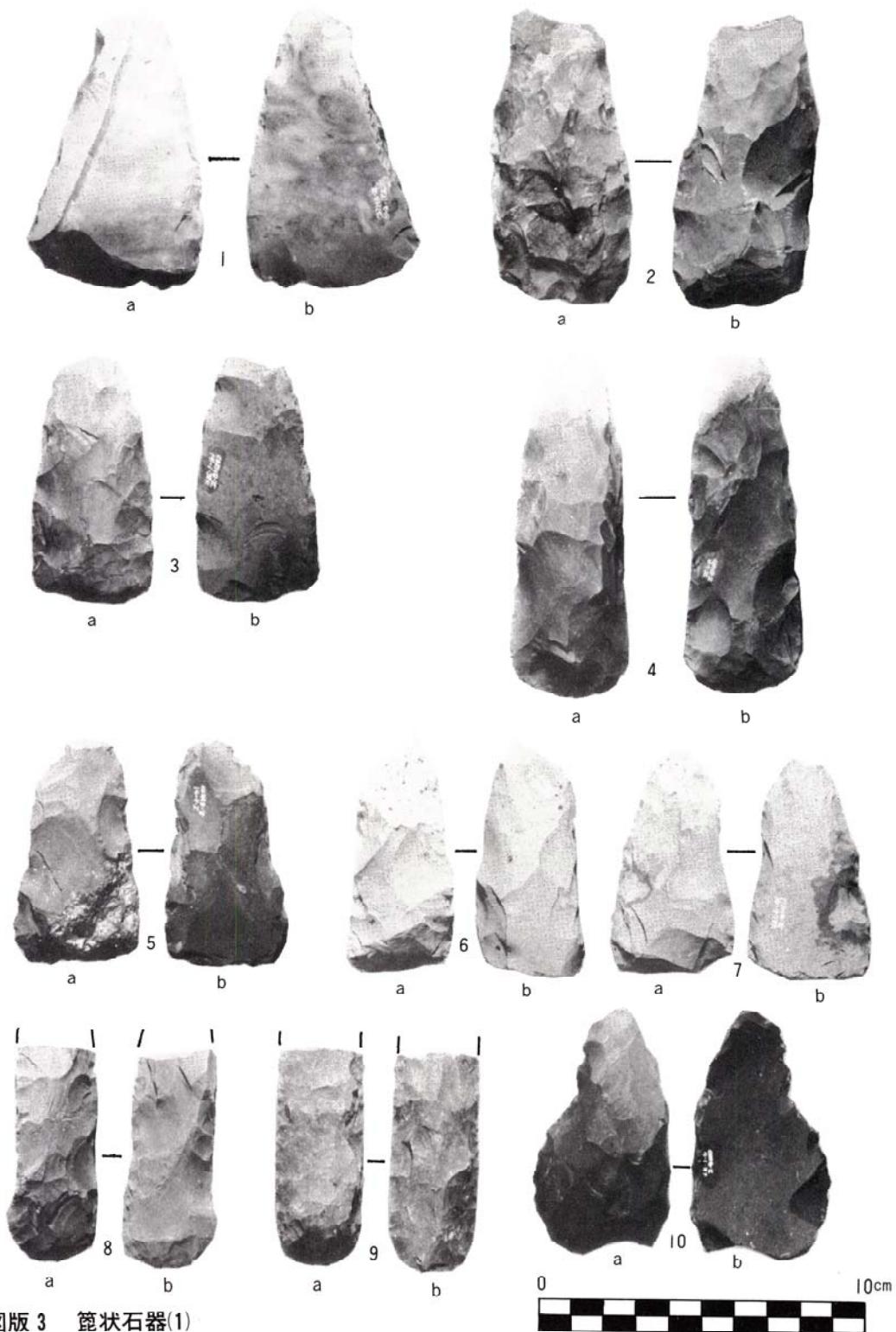
通称「石ベラ」と呼ばれている石器の一群を籠状石器として扱った。総数26点出土したが完形品15点、欠損品が11点である。4分類して説明する。

a類（1・3・5～7・10・19） 全体形がバチ型を呈し、片面加工もしくは半両面加工で、刃部正面が「アヒルのロバシ」状、断面が「カマボコ」状を呈した一群である。

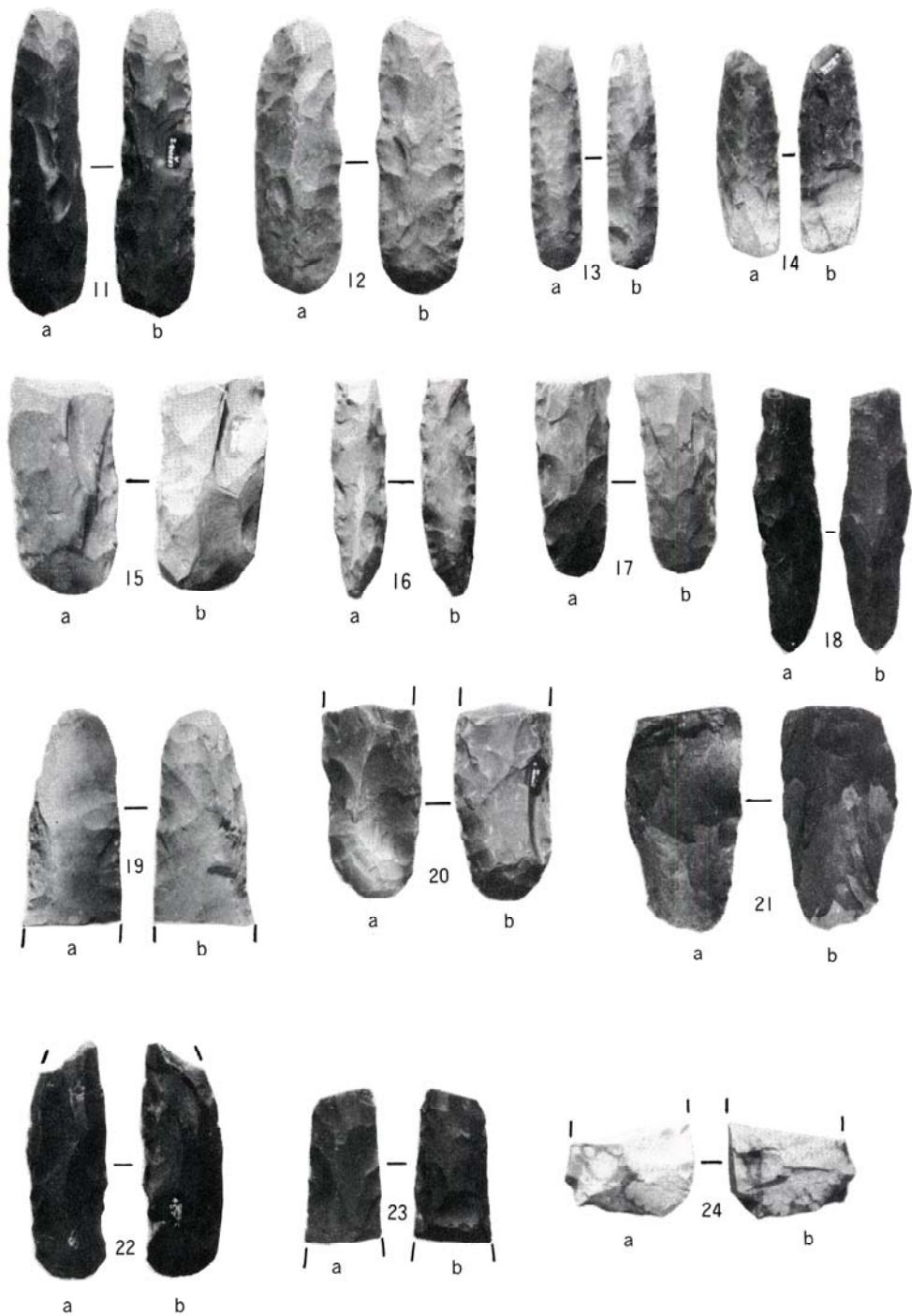
b類（13・14・16・18） 断面が凸レンズ状を呈し、巾が狭く、細身の一群である。13・14のように刃部を平行剥離で丸味に形成するもの、16・18のように尖頭状に形成するものがみられ、機能的差異があるものと考えられる。

c₁類（8・9・11・12・15・17・20・21） 断面がb類と同様に凸レンズ状を呈し、両端が丸く形成された一群である。12はその中でも典型的なもので、刃部に入念な剥離が施され、側辺加工も丁寧な調整が加えられている。

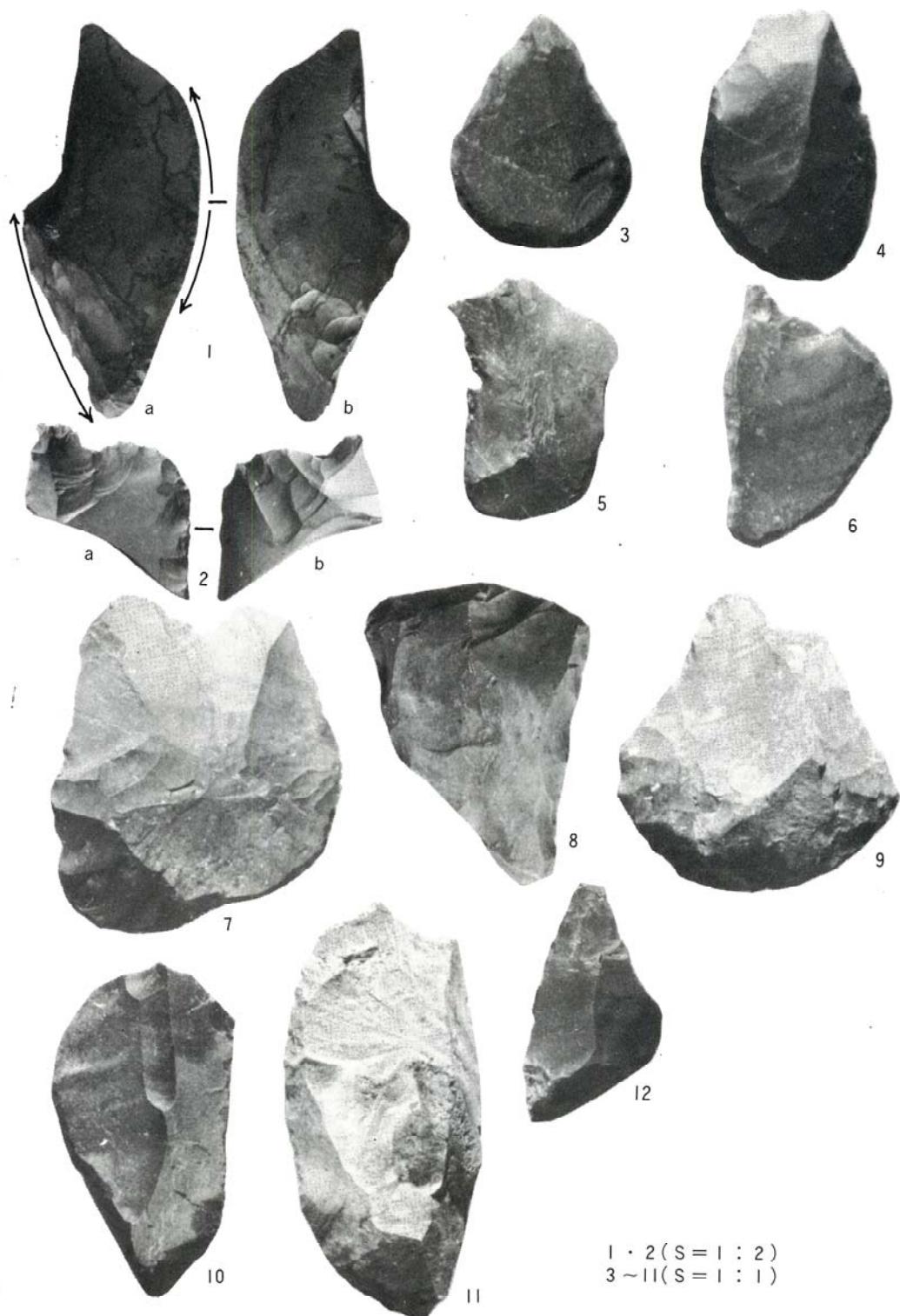
c₂類（19・22） c₁類と同様な全体形をもつが、片面加工もしくは半両面加工のもので



図版3 篦状石器(1)



図版 4 篦状石器 (2)



図版 5 手斧・削器



断面が「カマボコ」状を呈したものである。

d類(2・4) 全体がバチ型を呈するが、断面が凸レンズ状で両面加工で整形され、大型の一群で、打製石斧を小型化したような形を呈す。

磨製石斧 (図版6)

全部で5点出土した。そのうち刃部付近を失うもの3点、頭部を失うもの2点である。いずれも丁寧に面取りされた定角式のものである。

磨石 (図版7, 1~5・9・10・13)

全部で18点出土した。2分類する。

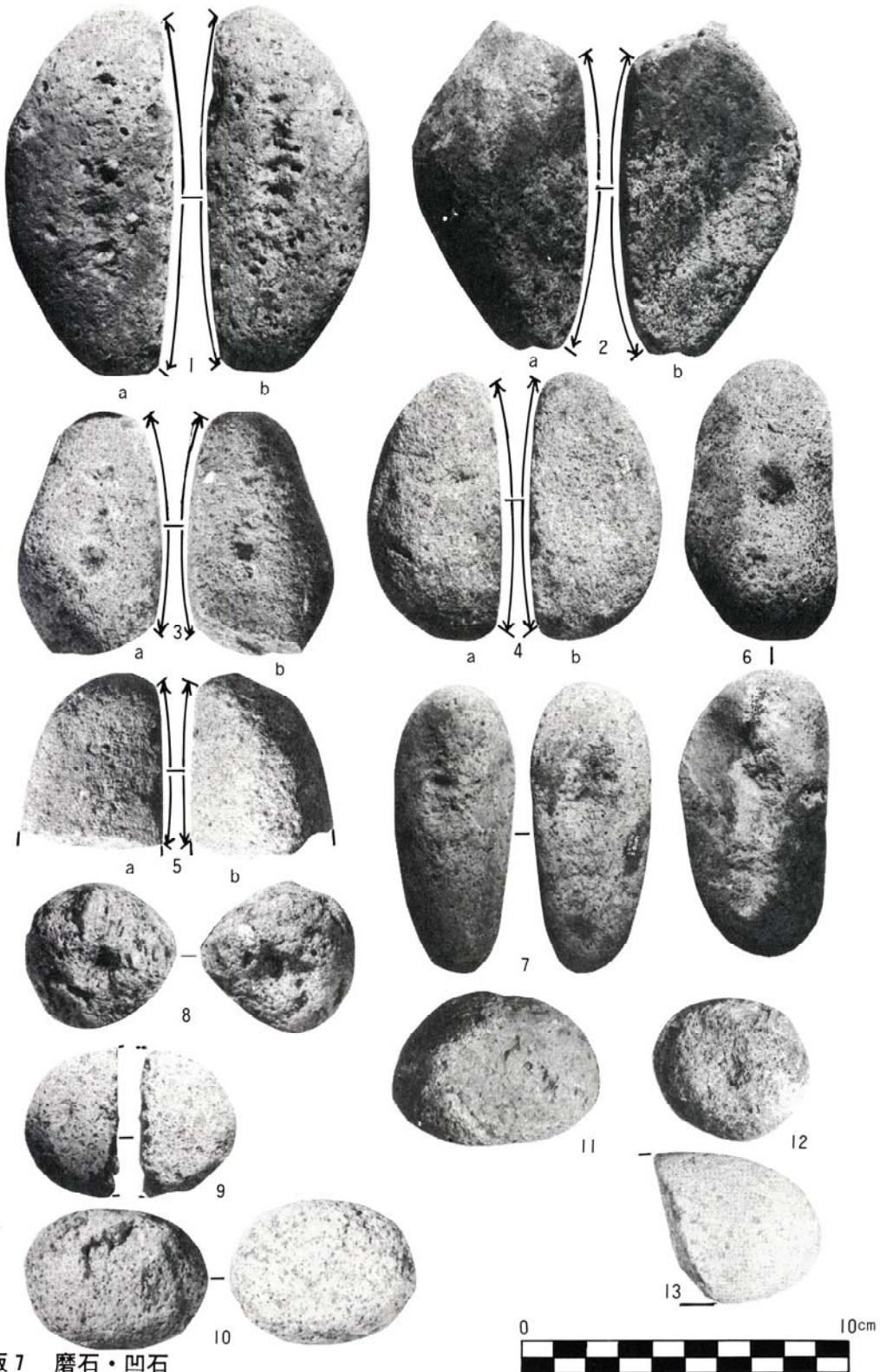
a類(9・10・13) 円形・楕円形を呈し、両面もしくは片面に磨面をもつ。12は凹をあわせもつ磨石である。

b類(1~5) 第1次調査でも多量に出土したが、今回の第2次調査でも10点出土した。断面が三角形が四角形を呈した礫の陵線を利用しているために、細長い使用面になっているのが特徴である。使用面はツルツルした磨面ではなく、「あばた」状を呈するものが多い。

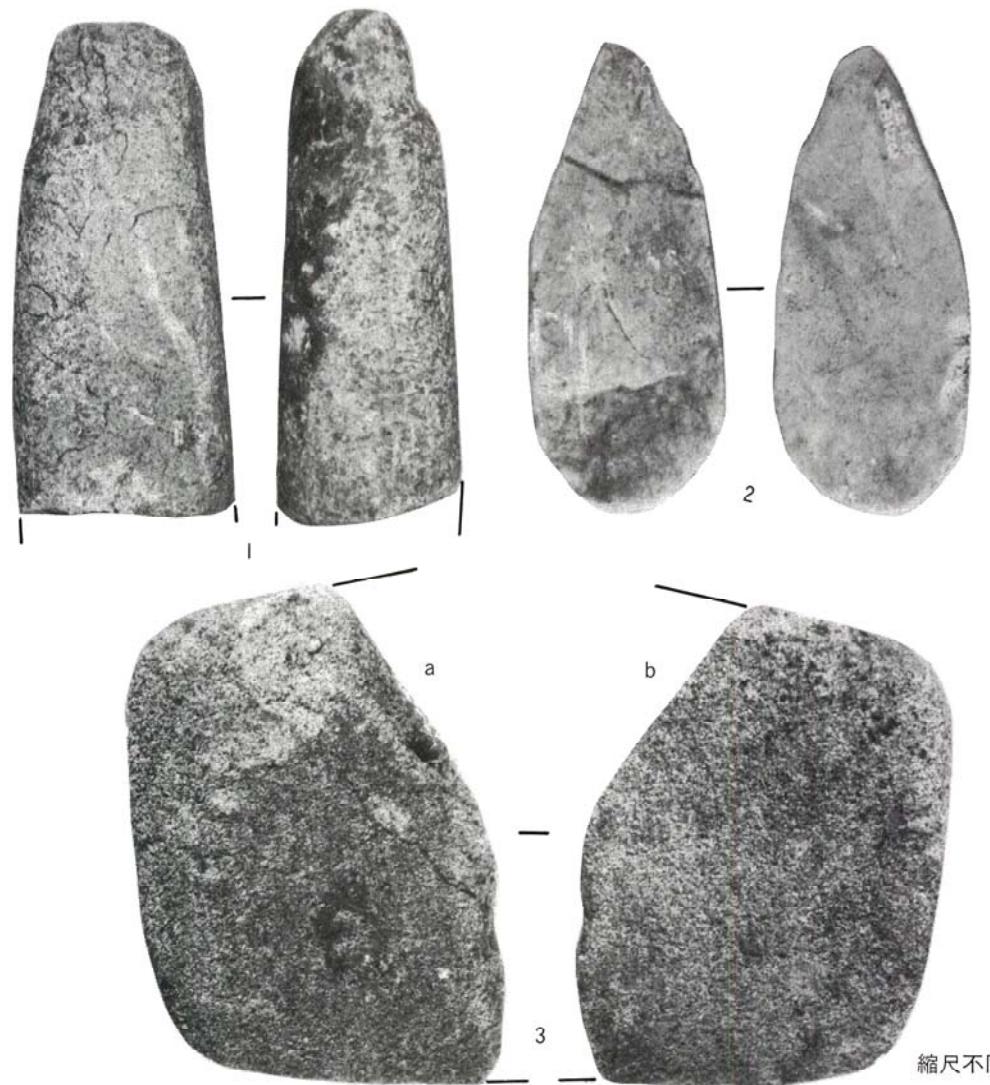
1や3のように2面の平坦な面に凹を有する例がみられる。

図版6 磨製石斧





図版 7 磨石・凹石



図版 8 石棒・石冠・板状石製品

凹石 (図版 7, 6 ~ 8 · 12)

円形ないし橢円形の扁平な円礫あるいは棒状の礫に凹痕を有する石器で、全部で14点出土した。

凹痕が1面にみられるもの、2面以上にみられるもの、凹痕が単独にみられるもの、鎖状に連なり帶状になっているものなど様々な形態がみられる。

石棒 (図版 7, 1)

1点出土した。現存長25cm、断面は橢円形を呈する。胴部長径10.5cm、短径8cm、頭部長径7cm、短径5cmを測る。全体の整形は敲打によるもので单頭の石棒と考えられる。

3) 石製品

板状石製品（図版7，2）

1点出土した。長さ5cm、厚さ0.5cmを測る板状の製品で、一方の端が丸く、もう一方が尖頭状に成形されている。両面が平坦になるように磨かれ、側面も丁寧に磨かれている。

石冠（図版7，3）

1点出土した。約半分を失い、現存高5cmを測る。断面が楔形を呈する。a面を観察すると凹石でみられるような凹がみられる。石材は砂岩を用いている。

IV 総括

I～III章まで述べてきたこと、また第1次調査の成果をもふまえて、巾遺跡の問題点、課題を提示してまとめとしたい。

巾遺跡は、山形県尾花沢市大字細野字巾・カバ山に所在し、龍氣川によって形成された河岸段丘上に立地する縄文時代中期の生活址である。

発見された遺構は、土壙12基・ピット4基などである。その時期については、3・4号土壙は出土した土器から大木8式期と考えられる。他の遺構も同時期頃と考えられるが、覆土から出土した土器が少なかったり、無いものもあり不明確である。

第1次調査で検出された遺構を含めると、土壙17基（土壙埋設土器1基を含む）、埋甕6基、ピット4基となる。これらの遺構を検出したところは、遺跡の主体があると考えられる集落や畠地の高位段丘よりも、一段低い低位段丘上からである。遺構や遺物が段丘の縁辺に沿うかのように分布し、土器のブロックにも同様な分布状態がみられた。これらのことから、2回に渡って調査を行ったところは、遺跡の縁辺部にあたると考えられる。

遺物は土器と石器が出土した。土器は縄文時代前期と中期のもので、主体は中期である。

第I群土器は前期初頭と考えられ、第II群土器の中で1・3a・3c・4・5・6a・7類が大木8a式、3b・6b類が大木8b式、8・9類が大木9式にそれぞれ相当すると考えられる。

土器の出土状態をみると、細かい破片になっているものの、一個体分がまとまっているなどまとまりのある状態で出土している。これらの土器群と遺構とが何らかの関係があるのか。それとも無いのか。あるとすればどのような関係があるのか。といった事はこれらの課題と言えよう。

石器類では、石鎌、石錐、石小刀、籠状石器、搔・削器、磨製石斧、凹石、石皿、磨石等が、石製品では石冠・板状石製品、石棒等が出土し中期の所産と考えられる。

最後に、調査にあたって地元の方々をはじめ、多くの方々からご協力を得て無事終了することができた。ここに明記して感謝の意を表します。

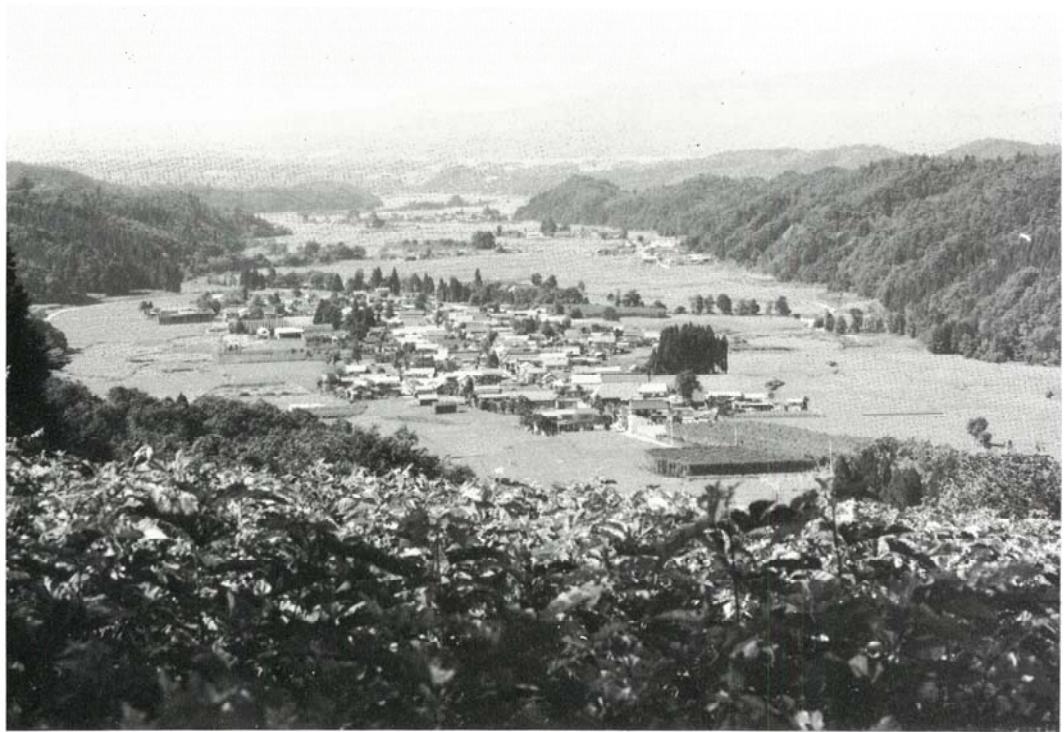
五十嵐大朔、五十嵐他外蔵、五十嵐寅蔵、五十嵐仲左衛門、斎藤弘、水上得雄、鈴木久根吉、菅藤貞次郎、柳橋十一、斎藤久一、柳橋俊一、水上徳太郎、五十嵐徳三

(順序不同・敬称略)

参考文献

- 1975年 東根市教育委員会・小林遺跡調査団 『小林遺跡』
山形県教育委員会 『岡山遺跡』
- 1977年 七ヶ浜町教育委員会 『大木岡貝塚』
- 1978年 南方町教育委員会 『長者原貝塚』
- 1979年 山形県教育委員会 『熊ノ前遺跡』
- 1981年 丹羽 茂 「大木式土器」 『縄文文化の研究』 4. 縄文土器II 雄山閣
山形県教育委員会 『大淵台遺跡』
『下野遺跡』
『思い川A遺跡』
『東興野B遺跡』
- 鈴木道之助 図録『石器の基礎知識III』 柏書房
- 村山市史編さん委員会 『村山市史』 別巻1 原始・古代編
- 1983年 山形県教育委員会 『中村A遺跡』
尾花沢市教育委員会 『巾遺跡』 第1次調査
矢島國雄・前山精明 「石錐」 『縄文文化の研究』 7. 道具と技術 雄山閣

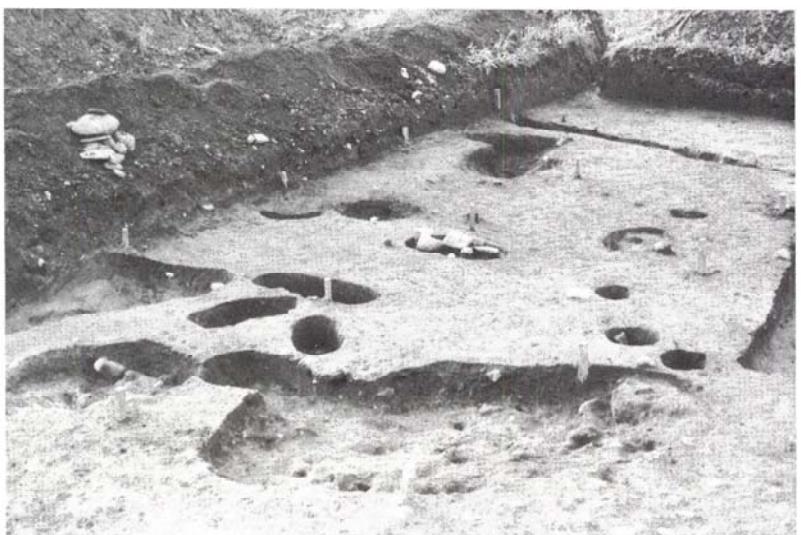
図 版



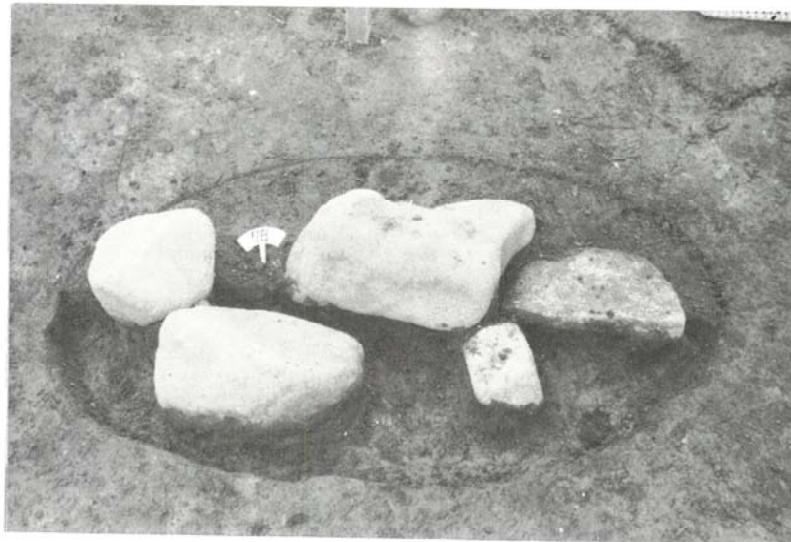
図版 9



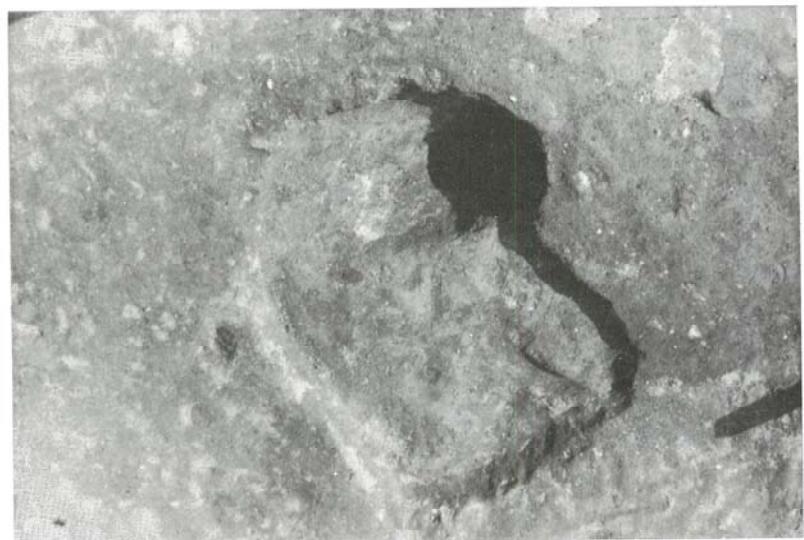
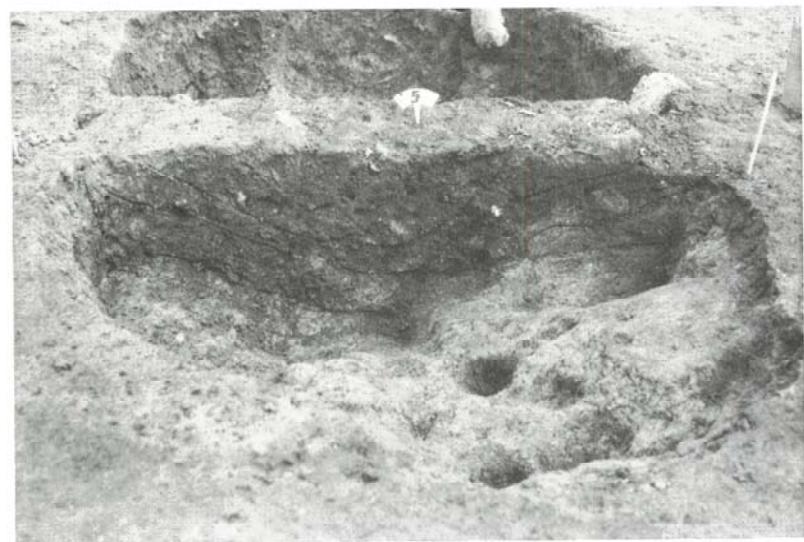
図版10



図版11



図版12



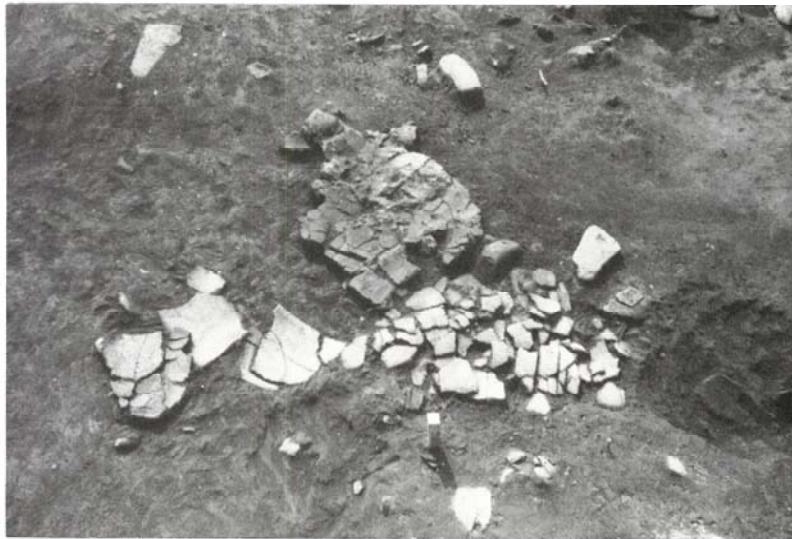
図版13



図版14



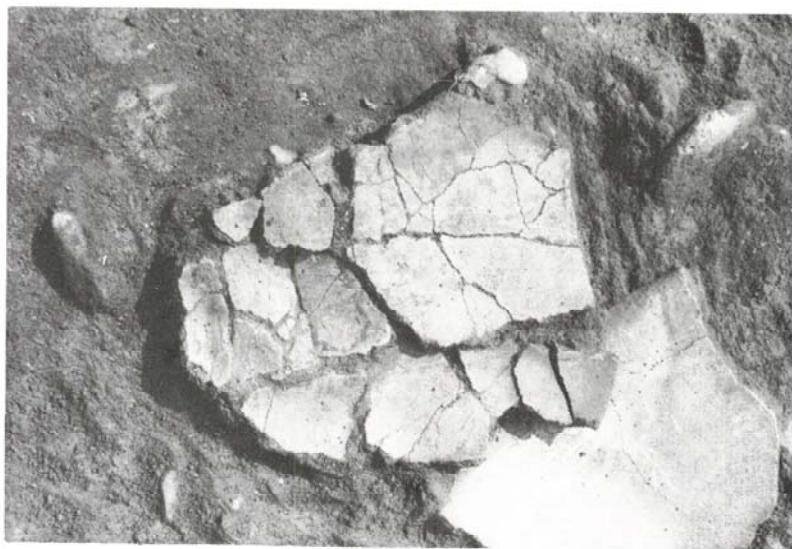
図版15



RP 65・68・69
RP 71・73



RP 69



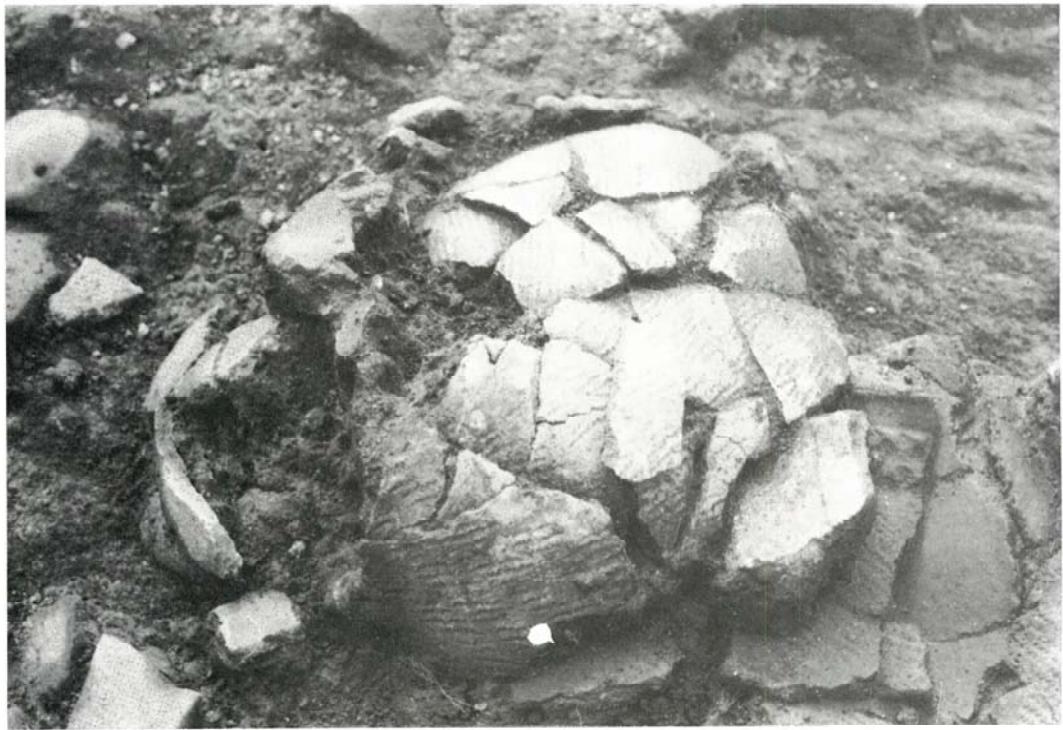
RP 65

図版16



R P 62

R P 63



R P 62

図版17



R P 43



図版18



R P 71

R P 70

R P 69



R P 71

図版19



RP 71の上面



RP 71の下面

図版20



◀ RP 63
器高 28.9cm
口径 22.8cm
推定底径 12.0cm



◀ S X 87内出土土器
現存高 13.5cm
底 径 12.3cm



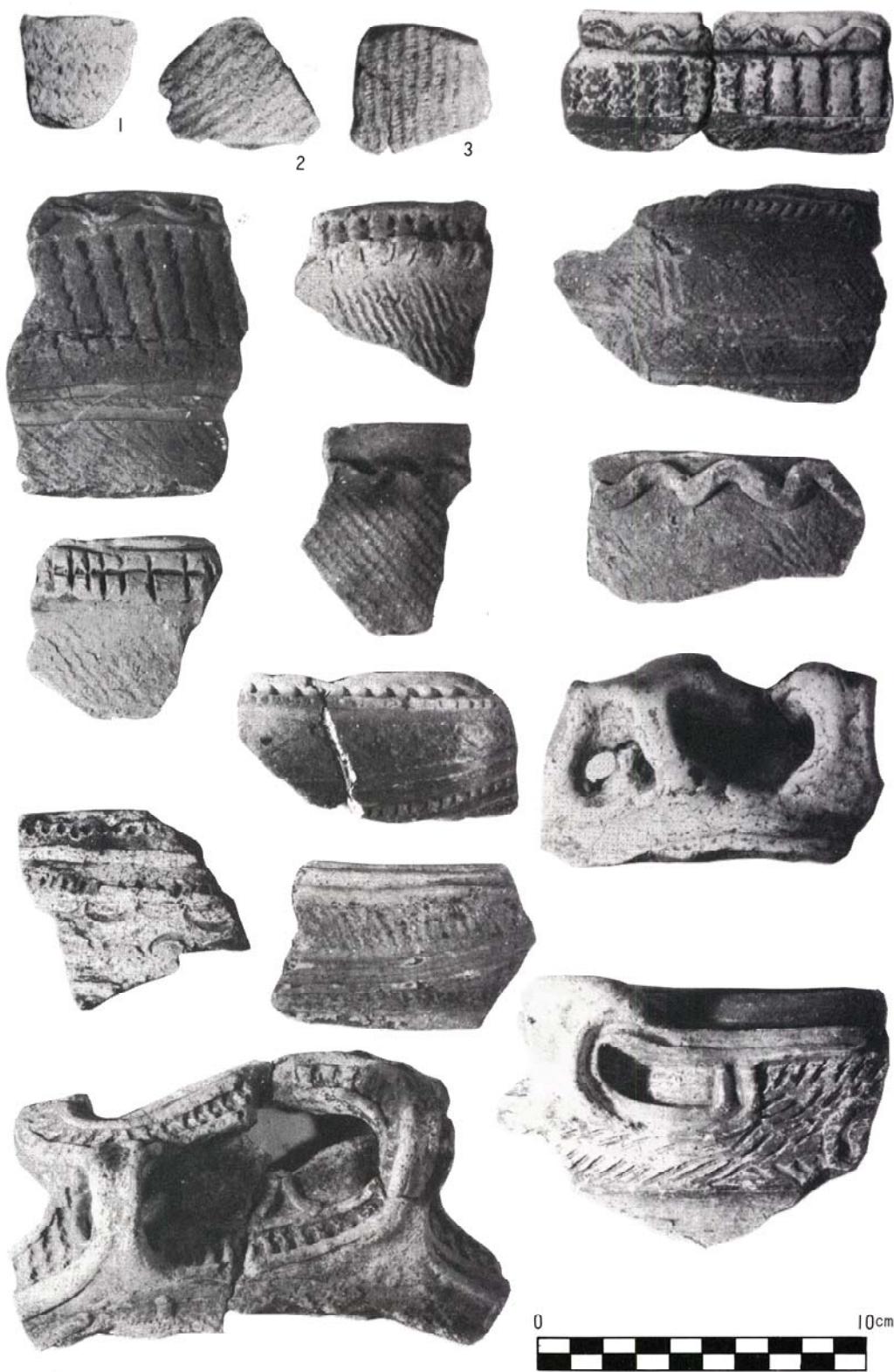
R P 68



R P 63



S X 87内出土土器



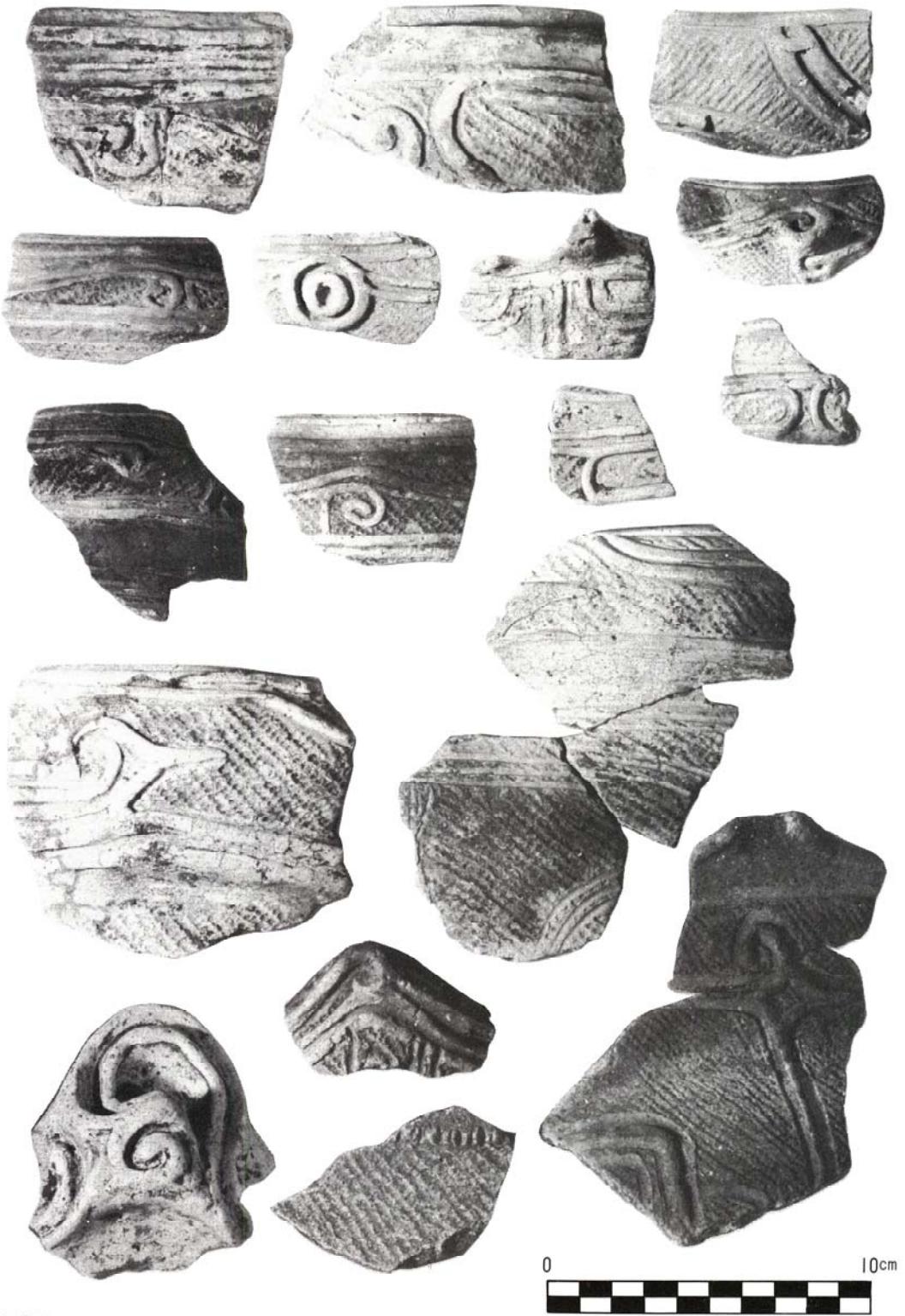
図版23



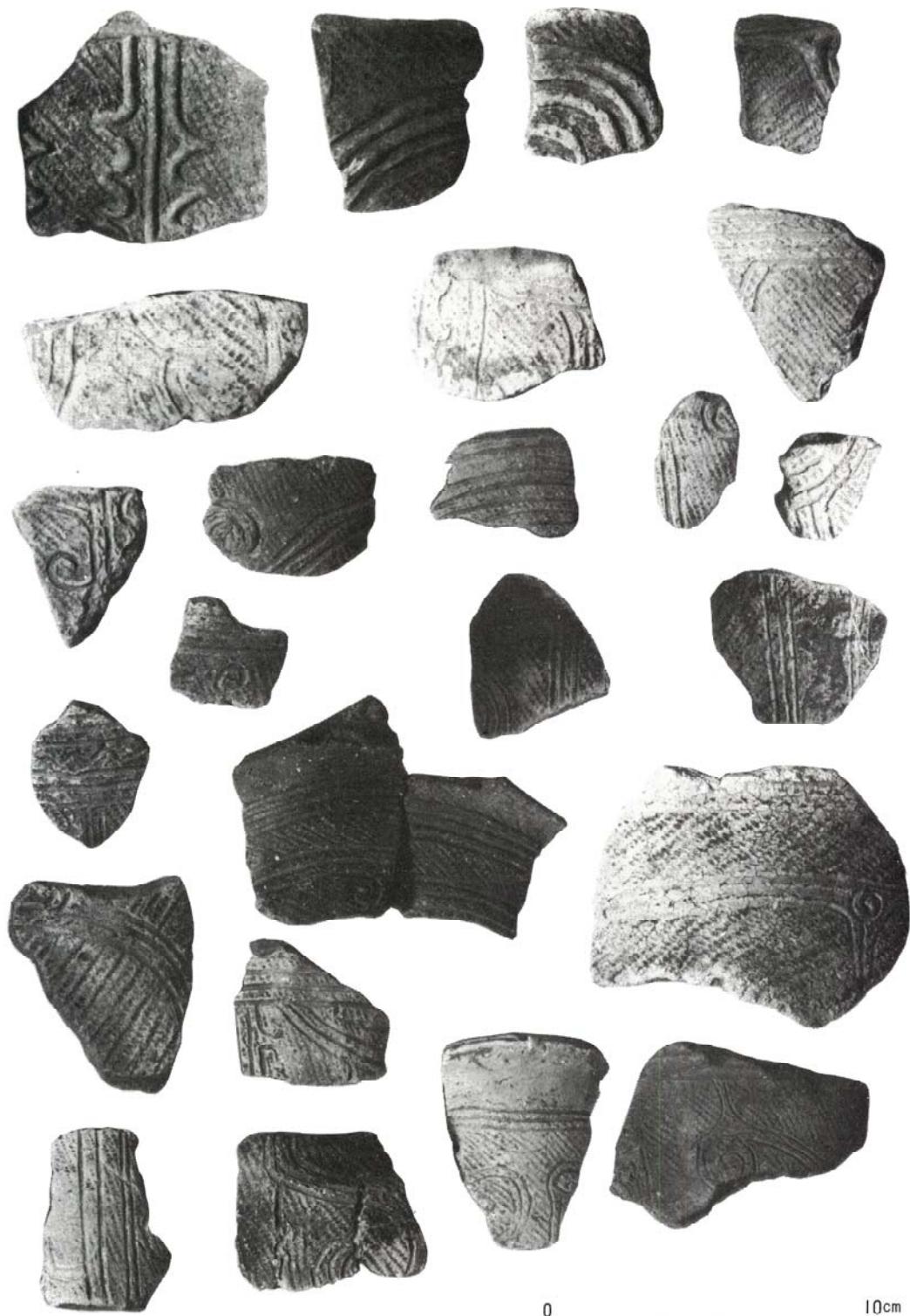
図版24



図版25



図版26



図版27

山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第4集

巾 遺 跡

発掘調査報告書

昭和59年3月発行

編集・発行 尾花沢市教育委員会
尾花沢市大字尾花沢2861
電話 02372—2—1111

印 刷 大場印刷株式会社
山形市立谷川二丁目485—2
電話 0236—86—6155(代)
